

プログラム

- 12:00 開場
- 13:00 開会挨拶 藤井 健（国土交通省 大臣官房審議官（国土政策局））
- 13:10～13:30 開催県挨拶・高知県が進める「小さな拠点」づくりの概要
尾崎 正直（高知県知事） 「集落活動センターの取組について」
- 13:30～14:15 基調講演 小田切 徳美（明治大学 農学部 教授）
「農山村地域の再生に向けて ～『小さな拠点』づくりへの期待～」
- 14:15～15:00 事例報告 ●高知県四万十市（大宮集落活動センターみやの里）
【発表者】竹葉 傳（大宮地域振興協議会 会長）
●島根県隠岐の島町（社会福祉法人ふれあい五箇）
【発表者】池田 眞理香（社会福祉法人 ふれあい五箇 施設長）
●広島県三次市（川西自治連合会（川西郷の駅づくり推進委員会））
【発表者】平田 克明（川西郷の駅づくり推進委員会 委員長）
- =====休憩=====
- 15:15～16:30 パネルディスカッション 「『小さな拠点』がつなぐ手作りの地域運営」
〔コーディネーター〕藤山 浩 島根県中山間地域研究センター 研究統括監
〔パネリスト〕竹葉 傳 大宮地域振興協議会 会長
池田 眞理香 社会福祉法人 ふれあい五箇 施設長
平田 克明 川西郷の駅づくり推進委員会 委員長
藤井 健 国土交通省 大臣官房審議官（国土政策局）
- 16:30 終了

1. 開催挨拶（主催者挨拶）

藤井 健（国土交通省 大臣官房審議官（国土政策局））

皆さまこんにちは。「小さな拠点」づくりフォーラム in 高知の開会にあたりましてご挨拶申し上げます。

まず、本フォーラムの開催にあたりまして大変なご尽力をいただきました高知県の皆様方に厚く御礼申し上げます。また、後ほど基調講演をいただきます明治大学の小田切先生、パネルディスカッションのコーディネーターをしていただきます中山間地域センターの藤山先生、またパネリストの皆様方には、本当にお忙しいところを時間を割いていただきましたことを改めて御礼申し上げます。



また今日は、私ども国土交通省の「小さな拠点」形成推進検討会の先生方にもお越しいただいておりますし、高知県の中で活動されている方だけでなく、「小さな拠点」づくりに取り組んでおられる方が全国からお集まりを頂きました。重ねてお礼を申し上げたいと思います。

さて、住み慣れた地域に暮らし続けていく、これはある意味当たり前のことであります。住み慣れた地域というのが、例えば生まれたところという人も多いでしょうし、結婚できた、転勤できたという人もいます。しかし、その地域に愛着を持てばそこがふるさとであり、ふるさとというところは自分たちを育んでくれたところです。ですから、愛着を持つ、住み慣れた地域に暮らし続けたいという思いは人間にとって当然の想いであります。ふるさとが、人によっては大都市という人もいるでしょう、農山漁村という人もいるでしょう、どういう地域であれ、住み続けたいという気持ちは、国全体で支えていかなければならない想いだと思います。

ところが、それは実は簡単ではないのではないか、ということに、今、多くの国民が不安を持ち、気づき始めた、そういう時代ではないかと思えます。その大きなきっかけとなったのが「3.11」です。あの「3.11」で、私たちは、住み慣れた地域に暮らし続けるという当たり前のことが、いとも簡単にととてもできないことになってしまうことに気づかされました。日本の国土の脆弱性、そして巨大災害というものの中で、それが非常に危うい、簡単にできないことなのだということが気づきました。今まさに東北では、住み慣れた地域に暮らせない苦しみを感じておられると思えます。

また、最近、グローバリゼーションということが言われ、製造業がどんどん海外に出ていってしまう。地域の産業であった林業や水産業が低迷をしている。働く場がなければ住み慣れた地域に暮らし続けることはできない。そしてもっと大きな問題がこれから日本全体を覆う可能性があるということに今注目が集まっています。その大きな問題が人口減少問題であります。

2050年の予測をしますと、今1億3千万人いる人口が1億人を切って9700万人にまで減少します。問題はその減り方であります。全国の居住地域を1キロのメッシュで区切って、それぞれの1キロメッシュの中の人口がどうなるかを計算しますと、実は、一律に人口が減るのではなくて、そのうちの65%のエリアで人口が半分になるということが分かりました。さらに言いますと、その65%の3分の1、ですから、日本全体の2割に当たりますが、その2割はまさに人口がゼロになってしまいます。この前も、大雪で市街が孤立をしましたが、大雪どころか、日々の生活も

維持できないというところがたくさん出てきます。

そして、これは集落だけ、過疎地域だけの問題ではありません。大都市の郊外部においても同じことが起こります。大都市の郊外部では、これに加えて高齢化で、介護・福祉が足りない、こういう大きな問題が地方以上に起こってきます。要するに、過疎地域から大都市まで、住み慣れた所に暮らし続けるという当たり前のことが、ますます難しくなってくるという問題があります。

日本は、四季折々の歴史・文化の中で、非常に多様な国をつくってきました。その多様性が実は、文化の力となって、日本の強みになってきた。ですから、この日本の国土がつくってくれた多様性が、日本の武器になってきたわけです。その武器となる多様性のある地域が、人口減少で消えていってしまう。住み続けることができなくなってくるという問題があるわけです。ですから、この問題は過疎地域だけの問題じゃなくて、日本全体の、みんなで考えなければいけない、解決していかなければならない問題だということが分かります。

そのひとつの解決の方法として考えられるのが、今日のフォーラムの「小さな拠点」です。後ほど、パネルディスカッションの中で「小さな拠点」とは何かというテーマがありますから詳しくはお話しませんが、簡単に言うと、人を集めるのではなくて、機能をまずできるだけお年寄りでも日常の全部がまかなえるようにコンパクトに集め、残った地域の人には、配達サービス、あるいは、輸送サービスという形で循環させていく。集めるということから、届ける、循環をする、そういうものが「小さな拠点」です。

その「小さな拠点」が生活を守っていく砦となるものでもありますし、守るだけではなくて、新しい商品を作ったり、例えば、道の駅にあるような、元気を作る場所でもある。さらにもっと言うと、もう少し頑張れば、Iターン、Uターンという形の中で、小学校、中学校を廃校にしないで、未来につなぐ“希望の砦”になるかもしれないといえます。

こういう砦が、日本全体で、過疎地域から地方まで含めて、日本を支えていく基本理念となる。これはある意味、「国土の細胞」をつくっていくものではないかと思っています。こういうコンパクトな「小さな拠点」というのは、一つの解決策になるのではないかと、しかも、重要な解決策ではないかと思っているわけです。

私どもは、今、新しいグランドデザインというものを作っており、国土政策をどうするかということを検討していますが、今日のこのフォーラムの成果を、そうした国土政策の中にフィードバックをしていきたいと思っております。今日のフォーラムが、日本全体の新しい解決策を見いだす場となり、そして、地域のそれぞれの皆さまの新しいヒントになるということを祈念致しまして、簡単ではございますけれども、私のご挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

2. 開催県挨拶・高知県が進める「小さな拠点」づくりの概要

尾崎 正直（高知県知事） 「集落活動センターの取組について」

皆さま、こんにちは。本日は、『『小さな拠点』づくりフォーラム』を高知県で開催していただきまして、本当にありがとうございます。そしてまた、多く皆さまが県内外からお集まりいただいております。この件につきましても心から御礼を申し上げたいと思っております。

本日は、国土交通省から藤井審議官、おいでをいただいておりますし、また、明治大学の小田切先生はじめ、多くの方々の皆さんにもご参加をいただいているフォーラムということになります。本当に、皆さま方のご協力に心から感謝を申し上げたいと思います。

先ほどお話がありましたように、この「小さな拠点」づくりは高知県にとりましても、極めて重要なポイントだと思っております。先ほど、都市部でもそうだというお話がありましたが、高知県は中山間地域の代表的な県であります。もっと言いますと、人口減少がスタートしたのが全国で一番早い県でございます。人口が自然減状態に陥ったのが平成2年からですので、約25年間、我々は人口減少問題に直面してまいりました。経済のピークは平成9年、そして、それから約10年の間に、経済と人口が約2割縮むという、いわゆる、人口減少社会としての地域社会というものを経験した県であります。

そういう中において一番厳しい状況にあるのは、過疎地域であります。この過疎地域の問題をどうしていくか。我々としては、今、その「小さな拠点」づくりに目掛けて、取組を進めておるところです。この取組をまさに、加速していこうではないかというこの時期に、この素晴らしいフォーラムを高知県で開いていただき、まさに、時宜に合った形で開いていただいたと、感謝を申し上げます。

残った時間、あと15分ぐらいだけお話をさせていただきまして、私が、今、高知県でどういう「小さな拠点」づくりをやろうとしているか、本県では、「小さな拠点」は「集落活動センター」と名付けていますが、このご報告をさせていただきたいと思います。

■過疎地域の現状と課題

高知県は非常に美しい自然があり、川があり、そして、素晴らしい、豊かな中山間地域であります。残念ながら、数字を見ると、過疎地域の人口は約50年間で約49%減り、さらに、過疎地域の生産人口は43%減少するという状況です。また、高齢化率ですが、本県の高齢化率は28.8%で、全国が今後10年先に到達するであろう高齢化率に達している、さらに過疎地域の高齢化率は37.3%にまで至っているという状況です。裏返しの話になるかとは思いますが、この30年間で過疎の若年者は約74%も減少しているという状況であります。

こういう中において、過疎地域自体を維持していくことがなかなか難しくなっています。いわゆる「限界集落」という非常に残念な言葉がありますけれども、限界集落といわれるものがだんだん増えてきているという状況です。私も中山間対策に力を入れて取り組んでまいりましたが、やはり、もう一段踏み込んだ対策をとる必要があるのではないか、まずは、現状を調べようということで、平成23年にアンケート調査を実施いたしました。



国勢調査の結果を踏まえた色々なデータ収集から始まって、1,359 集落を対象に、集落の聞き取り調査を行ったり、世帯ごとのアンケート調査を実施したりして、中山間地域の実態を調べてみたわけであります。

この結果は、ある程度予想された側面もありますけれども、改めて数字として浮かび上がってきた内容は衝撃的でありました。

将来、集落を維持できないのではないかと、集落が 10 年後に消滅している、もしくは、衰退していると答えられた方が、アンケート対象者の約 75.1%、今後の集落の共同作業等が維持できない、将来できるかどうか分からないとお答えになった方が 66.9%でした。また、生活用品の確保で困っている、課題があるというような日々の苦しみを訴えられた方が 63.1%、「集落の基幹産業が衰退をしている」85.2%、「産業振興につながる資源がない」72.1%、「後継者がいない」77.1%などという答えが返ってきたわけであります。正直、非常に厳しい結果でありました。

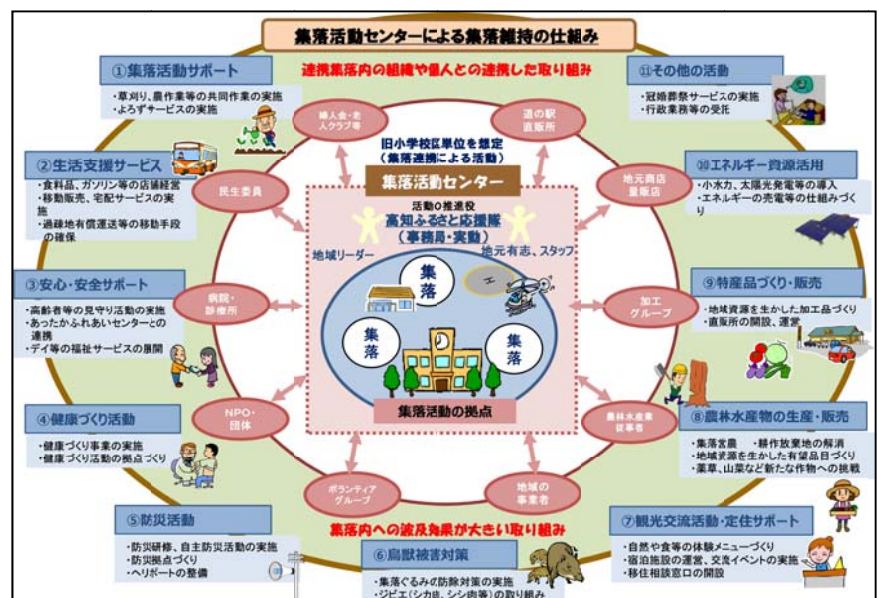
しかしながら、住民の皆さま方の思いはどうかということでもあります。このように厳しい状況であるにもかかわらず、地域に愛着や誇りを感じているとおっしゃった方は、93.0%います。そして、今後も住みたいと答えられた方は 76.7%もおおいでになったわけであります。

■集落活動センターの取組について

何とか、このまま住みたいという、この住民の皆さま方の思いに応えていかないといけない、この思いを実現していかなければならないということで、平成 24 年度から、「集落活動センター」というものを、県内各地に設置していこうではないかという取組をスタートさせました。複数集落の拠点となる施設、典型的にいうと、かつて小学校だった建物などを活用し、複数集落の中で一ヶ所、活発な拠点があるという状態をつくりだそうというものです。

例えば、元小学校の教室のひとつを利用して売店などの生活支援サービスを提供したらどうか。また、その隣の教室を活かして、デイサービスの、高知では「あったかふれあいセンター」という、制度の垣根を取り払った取組をやっていますが、こういう「あったかふれあいセンター」などをやってみてはどうか。さらには、別の教室を活かして、健康づくり事業を実施してはどうか。さらに、地域産品づくりとか販売とか、いわば、集落の価値を外に発信し、ものを作り出していくような活動を、別の教室を使ってやってみたらどうか。さらには、そういう取組をベースにしていきながら、

農林水産業の受託、例えば、生産などを行う組織を作っていってはどうだろうか。他にも、天井に太陽光パネルなどを入れたりとか、近所の川を小水力発電で生かすということもできないか。そして、本県は南海トラフ地震の危機に直面をしている県であるため、



防災対策も非常に大きな問題であります。そこで、集落活動センターを自主防災組織の活動の拠点として使っていくということも考えられます。小学校でしたら、例えば、校舎とグラウンドを活かしてヘリポートにしていこうと、いざというとき、例えば、ドクターヘリや防災ヘリの拠点として使っていくことができないか。このように、元小学校の建物などを活かして、色々な取組を1ヶ所に集める「集落活動センター」を、県内各地につくっていこうという取組を、今、進めているところです。

平成24・25年度の2年間を通じて、集落活動センターが11ヶ所できています。間もなくあと2ヶ所できる予定で、合計13件の集落活動センターが設置されることとなるだろうと予想しています。ただ、目標としては、10年間で130ヶ所ぐらいの集落活動センターを県内各地につくっていきたいと考えています。130ヶ所という目標は、それぐらいの密度であれば、中山間地域の暮らしを一定程度支えていくことができるぐらいのではないかとこのところから設定したものです。

■集落活動センターの取組の支援策

この集落活動センターの取組について、県としてどういう支援をしているのかですが、ひとつは資金面での支援です。まず、集落活動センターの設置・取組に必要な経費、ハード・ソフトともへの支援ということで、最初の3年間で1ヶ所ごとに3,000万円を支援します。最初の1年で3,000万を一気に使ってもいいですし、毎年1000万ずつ使っ

ていただいても構いません。特にハード整備が必要な場合は前倒しで使っていただく場合が多いでしょう。これと併せて、「高知ふるさと応援隊」と呼んでいますが、活動従事者の人件費を含む活動経費に対しても支援をしています。1人当たり100万円で、最長4年間は利用できる、4年間で計400万円の支援をしています。

また、中山間地域対策に係る専門家の方々6名にアドバイザーになっていただき、集落活動センターの立ち上げや運営等について助言をしていただいたり、研修会等を実施しています。

また、そもそもですが、集落活動センターごとに、市町村・県・関係者による支援チームを編成しており、この支援チームにおいて様々な課題についてできるだけワンストップで応援していこうという取組も行っています。

さらには、集落活動センターの中には成功している例もありますので、そうした成功事例や、いろいろな“使える”制度などを掲載した『支援ハンドブック』を作るなどの取組も行っていこうとしているところです。

■集落活動センターの取組の支援策

(1) 資金面での支援

●集落活動センター推進事業費補助金(25年度予算額155,000千円(対前年度比55,000千円増))

【補助内容】

- ①集落活動センターの取組に必要な経費(ハード・ソフトとも)への支援
- ②センターの設置や運営に係る活動従事者(高知ふるさと応援隊)の人件費を含む活動経費への支援

【補助事業者】市町村 【補助率】市町村事業費の1/2以内

【事業実施主体】①市町村及び集落組織、地域団体、NPO等 ②市町村

【補助上限額】①30,000千円/1箇所(3年間) ②1,000千円/1人

【補助期間】①最長3年間 ②最長4年間(準備期間1年+活動期間3年)

(2) アドバイザーの派遣

●集落活動センターの立ち上げや運営等について、総合的に助言を行う県のアドバイザー等を導入
(集落活動センター推進アドバイザー:中山間対策にかかる専門家等6名を委嘱)

(3) 研修会等の開催

●予定地区の住民や市町村職員、高知ふるさと応援隊等を対象にした研修会や交流会等の開催
(25年度はブロック別の研修会も開催)

(4) 支援チームによる支援

●集落活動センター支援チームによる支援【市町村ごとの支援チームを編成し、全庁を挙げた支援を展開】
・センター実施地区の活動の充実、強化や、準備地区の円滑な立ち上げに向けた支援
構成メンバー:中山間地域対策課、活動に関連する課室、地域支援企画員(総括)・地域支援企画員、関係出先機関等

(5) 情報提供による支援

●集落活動センターの普及、拡大に向けた総合的な情報の提供
→「集落活動センター支援ハンドブック」の作成

【内容】集落活動センターの概要、取組に対する支援策、自立に向けた成功イメージ、センターの取り組み事例

9

■今後の集落活動センターを核とした中山間対策の展望

先ほど申し上げましたように、集落活動センターは10年間で130ヶ所の開所を目標としていますが、一方で、その担い手として、「高知ふるさと応援隊」、これは「地域おこし応援隊」を少しステップアップした、県独自の、もしくは、国の予算を使っていただくものでありますが、これを1000人ぐらい導入することを目標にしております。こうしたことを通じて、集落活動センターを、中山間地域における様々な課題の解決の拠点としていきたいと考えております。

なお、県にはこのほかにも、例えば県全体の経済を活性化するための「産業振興計画」とか、「日本一の健康長寿県構想」とか、南海トラフ地震対策であるとか、色々な施策があります。このような施策を総合して、できる限りこの集落活動センターに重点投資をしていこうと考えています。例えば、今、移住促進に一生懸命取り組んでいるところですが、この移住促進施策なども、ぜひ、集落活動センターと組み合わせて展開できないかと考えているところです。

集落活動センターを10年間で130ヶ所つくるということになれば、1年間で大体13ヶ所ぐらいいは作っていかないといけないという計算になります。しかしながら、現在、2年間で13ヶ所が立ち上がろうとしているという状況です。まだまだペースが遅い、足りないと思っています。が、何が課題となっているかいろいろ考えてみました。すると、実は、やはり集落を対象としての取組ですから、様々な活動の「手」が必ずしも多いわけではないという現実があるのではないかと。地域はそもそも随分と衰えてしてしまった先にあるので、地域の資源を生かして、それを活性化に使おうとしても、もう新しい資源などないとおっしゃる場合があります。また、担い手となる人もそんなにたくさん居るわけでもない。逆に言うと、「10年早く、こういう取組をやってくれたら参加したのに」とおっしゃる方もいらっしゃいます。このため、『地域外から“新しい視点やアイデア”を取り入れることができる仕組みづくり』が重要となります。新しいアイデアを県の中から提案していきます。例えば、山の上にある集落が候補となれば、例えば、登山の基地として取組を行うことで、新たに集落活動センターの取組をやってみませんかと提案します。今までそんなことはやってなかったという場合もあるでしょうから、例えば、登山などの専門家の方にアドバイザーに入ってもらい、集落活動センターを立ち上げてもらうのです。また漁村であれば、本来の集落活動センターの機能の他に、釣りレジャーの拠点としてもやってみませんか、専門家の方と一緒に連れてきますので、一緒に考えてやってみませんか、と提案します。外から、新しいアイデアやメリットを組み込んできて、地元の皆さんと一緒に考えて、地元のものにしていく。そういう取組なども今後必要になってくるのではないかと考えています。

私は、10年後を見据えた仕組みづくりが不可欠だと思っています。今は何とかなっていても、あと10年たったら、本当に大変なことになってしまうのではないかという思いがあり、中山間地域の衰退や人口減少に全国で真っ先に突入した課題の先進県である高知県が、課題解決の先進県として、その解決モデルを確立したいという思いで努力を重ねていこうと考えています。

このような取組を高知県では行っています。今日の「小さな拠点」づくりフォーラムを通じて、また、我々の取組に対して、色々なコメントやご支援もいただいて、次なる活動につなげていければ幸いです。

本当に皆さん、今日はようこそ高知県においでいただきましてありがとうございます。心から感謝を申し上げまして、私のご挨拶兼ご報告とさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

3. 基調講演 『農山村地域の再生に向けて ～「小さな拠点」づくりへの期待～』

講師：小田切 徳美（明治大学農学部教授）

皆さん、明治大学の小田切でございます。今から 45 分ぐらいの基調講演になりますが、どうぞよろしくお願いいたします。

今日の参加者は約 300 名と聞いております。先ほどもロビーで、何名かの皆さんにご挨拶をさせていただきましたが、県内の多くの私の友人にもお越しいただきました。そして、県外からも、たくさんの方がいらっしゃいました。青森県などからもいらっしゃっていて大変驚いています。



さて、皆さまは、今までのお話を大変心強く、あるいは嬉しく受け取っていただいているのではないのでしょうか。国土交通省の藤井審議官は新しい国土形成計画を作る責任者のお一人です。また、尾崎知事は当然ながら高知県の今後について責任をもたれている方です。そのお二人が、同じことをおっしゃっています。それは、「小さな拠点」、あるいは集落活動センターをつくることによって、農山村の再生が延伸するのだということでした。

当然のことながら、これからの日本は人口減少していきますし、あるいは、今回の雪害でも孤立集落が出ています。そうすると、「そんな所に住むな」というような暴論も聞かれるわけです。しかし、国の責任者と県の責任者のお二人が、そうではないのだということを、高らかに宣言されたと感じています。

私は、この「小さな拠点」という構想を、約 5 年前から国土交通省の皆さんとご議論をしながら温めてまいりました。それが、こういう形で、国も県も同じ方向を向いて、そして、全国から 300 名の方々が集まるような状況になったということを、大変心強く、そして嬉しく思っています。そういう意味で今日は、少し力を込めてお話をさせていただきたいと思います。

I. 農山村の実態

■「3つの空洞化」の段階的進行

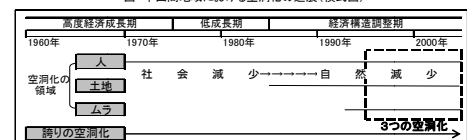
さて、お話に移りたいと思います。まず、「農山村の実態」です。今日お集まりのほとんどの方々は農山村からいらっしゃっておりますので、これをお話する必要はないと思いますが、一つだけ、確認をさせてください。このポンチ絵では、人・土地・ムラの三つの空洞化を表しています。まず、人の空洞化、これが 1960 年代、1970 年代から発生して今に続いている。土地の空洞化、耕作放棄地問題が、住宅街地域を中心に問題提起されたのは、実は 1985 年の農林業センサスがスタートでした。そして、ムラの空洞化、集落機能の脆弱化は 1990 年代から始まっているといわれております。

実は、この三つの空洞化は、かなり明確な時代区分とともに生じています。その一つの証拠が「過疎」、「中山間地域」、「限界集落」という造語の誕生です。まず「過疎」ですが、それまで日本語には過密という言葉はありましたが、「過疎」=まばら過ぎるという言葉はありませんでした。

I. 農山村の実態

1. 「3つの空洞化」の段階的進行

図 中山間地域における空洞化の進展（模式図）



- 各キーのキーワード=造語 ←強いインパクト
- 人の空洞化 →「**過疎**」
 - 土地(利用)の空洞化 →「**中山間地域**」
 - ムラの空洞化 →「**限界集落**」

この言葉は、当時の激しい人口減少の中で、あるジャーナリストが創ったといわれています。また、「中山間地域」という言葉自体は、実は 1950 年代から、昭和 20 年代からいわれている言葉ですが、今の意味とはだいぶ違っています。今のような意味で使われたのは、実は、先ほど申し上げたように、1985 年に耕作放棄地が大量に発生して、さあ大変だということで、農水省の米価審議会というところで言われ始めました。そして、ご存じの「限界集落」、これはまさにこの高知県で生まれた言葉ですが、1991 年に、ある社会学者の先生がお使いになりました。こういった人・土地・ムラの三つの空洞化が押し寄せて、今や、段階的に全て重なっている状況、これが、現在の中山間地域、農山村です。

■地域経済の後退

右のグラフの線は農業粗生産額を表しています。農業粗生産額のピークは 1984 年です。これ以後、米価が引き下げられ、そして、今のようにならかに農業粗生産額が下がる状況が続いております。実は、このピークを迎えた後に、「政府建設投資(土木)」、端的に言えば、公共事業があたかも農業粗生産額の減少をカバーしているような状況があったわけです。ところが、これも 1990 年代の末からピークを迎えて、大きく減少しています。つまり、一言で言えば、1990 年代末から農業も建設業もピークを終えて、いわば右肩下がりの状況になっているという実態です。

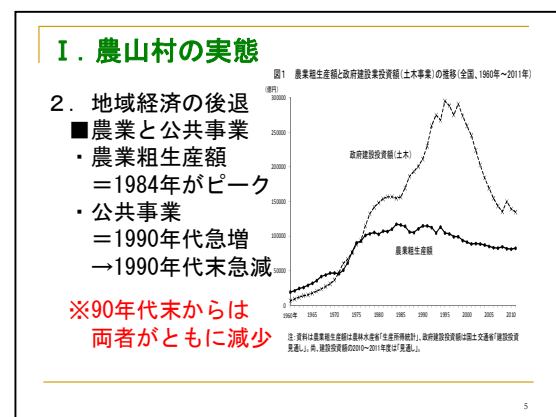
こういう状況の中で何が起きているのか。実は、農家レベルで言えば、専業農家の所得の減少も確かに発生していますが、実は、それ以上に、第 2 種兼業農家(今は「副業的農家」といいます)の農外所得が激しく減少しております。残念ながら、この統計は今から 10 年以上前の 2003 年の統計であり、これ以降、農水省ではこの統計を公表しておりませんので、この数字を使わざるを得ないのですが、1998 年から 2003 年のわずか 5 年間で、農外所得は 2 割も減少しています。この副業的農家は、農村の一般的・標準的な家計を反映していると言っていいでしょう。そういう意味では、現在の局面は、コミュニティが厳しいというだけではなく、経済の再生もまた求められているという局面になっているわけでありま

す。

II. 農山村再生に向けての地域戦略

■地域づくり

こういう状況の中で、何を成すべきなのかということを次にお話したいと思います。様々な議論が存在しておりますが、その議論の中でも、はっきりと方向性を示しているのが、「地域づくり」という考え方です。



I. 農山村の実態

■農家単位での所得動向

- ・副業的農家の所得減少
- ←農外所得の減少がリード

表1 農家の形態別に見た所得構成およびその変化(全国、1998～2003年)

	単位: 千円, %									
	農家計		専業農家		準専業農家		副業的農家			
2003年	農家所得	1,103 14.3	4,744 62.6	852 21.9	332 4.40	農外所得	4,323 56.1	851 11.2	5,568 65.8	4,773 63.50
	生金等	2,286 29.6	2,061 27.2	2,042 24.1	2,408 32.10	農家総所得	7,712 100.0	17,516 100.0	8,462 100.0	7,513 100.0
1998年～2003年の増減率	農家所得	-11.5	-12.1	-25.9	32.0	農外所得	-18.6	-16.2	-10.5	-21.1
	生金等	7.7	16.9	2.0	6.7	農家総所得	-12.1	-6.3	-9.7	-12.2

資料: 農林水産省「農業経営動向調査」(各年版)より作成。

※コミュニティ再生と同時に経済再生が要請

6

この「地域づくり」という考え方は、実は、1980年代の中ごろからスタートしたバブル経済の中でのリゾート開発と、そこで生まれた「地域活性化」という言葉の対抗軸として生まれてきました。リゾート開発はもうすでに大昔の話だと思われるかもしれませんが、しかしそう昔のことではありません。農村でも「地域活性化」としてリゾート開発が“イケイケドンドン”で進められた時代がありました。しかし、この地域活性化、すなわちリゾートブームがバブル経済の崩壊とともに去ることによって、「活性化」よりも「地域づくり」なのだという考え方が、農村部の中に芽生えてきたと考えております。もちろん、今でも、地域活性化という言葉が使われている方もいますが、それは、かつてのように外から資本を呼んできて、大規模な開発をするという意味ではないと思います。その意味で、「地域づくり」という考え方が、農山村における一般的な、基本的な理論となり始めていると考えていただいてよろしいのではないのでしょうか。

さて、それはどういう内容なのか。そもそも、「地域づくり」という言葉を日本で一番最初に定義したのは、早稲田大学の地理学の宮口先生ですが、先生は『時代にふさわしい新しい価値を、地域それぞれの特性の中で見だし、地域に上乘せをする』と定義されています。新しい価値を地域の中に創っていく。単なる従来の価値だけではなく、オン（on）していく、上乘せしていくという考え方が明確にされたわけであります。

その中身を、私は三つの点でまとめております。まずひとつは①内発性です。リゾート開発のように、外部資本を呼び込んで、あるいは、開発するときに東京のシンクタンクに全てをお任せするような、いわば、外在型発展ではなく、内発的発展を遂げるのだということです。ともかく、地域の資源を寄せ集め、そして、外部の人の意見を聞きながらも、内発的に物事を進めていこうでないか。こういう考え方が、バブル経済の反省から、そして、農村の現実の中から、はっきりと生まれてきたのが、この約20年間のトレンドでございます。

こういう考え方をすると自ずからその地域づくりは②総合性を帯びてくることになります。かつては、経済的な活性化一本やりでした。しかし、地域の課題は経済だけではありません。福祉も、あるいは、景観も、文化も、もちろん、教育もあります。それぞれの実態に応じた課題に取り組むとするならば、おのずから総合的な取組になります。なおかつ、地域の課題あるいは地域の得意分野を意識すれば、総合的であると同時に、多様になるという結論が出てくると思います。

ここまでは、皆さま方も合意できるころだと思いますが、あえて、三番目に③革新性としています。英語でいえば、Innovativeということになりますが、技術革新の革新です。地域を内発的に発展させようとする、従来どおりではなかなか事が進みません。従来のままで残念ながら右肩下がりになってしまった。だとすれば、地域の内部の仕組みを変えていくということが求められます。端的に言えば、意思決定の仕組みです。従来の農村の意思決定は、集落という場で行われてきました。集落は、後でお話ししますように、守りの組織としては大変な強靱性を持っています。従ってこれは決して潰してはいけないものであります。しかし一方で、新たに一步を踏み出そうとすると、実は、集落は必ずしもそれが得意ではありません。集落の区長さん、多くのところが輪番制、あるいは、最短1年間での交代ではないのでしょうか。1年間で輪番制ということは、新しいことをしないしてほしいというメッセージが、その決定の仕方の中に含まれていると考えても過言ではありません。なおかつ、集落は残念ながら男社会であります。集落の寄り合いの場を見れば、大変よく分かります。高知県は大変女性が強いので、高知だけは例外と申し上げ

ますが、一般的には、高知以外では、女性の方が、寄り合いに出て発言するということは、実は、ほとんどないのが実態です。それどころか、寄り合いの後ろに固まって座って、代理出席であることを体で表しているというのがほとんどではないでしょうか。そういう意味では、集落自体は必ずしもその強い意識を持っているわけではないにせよ、結果的に見れば女性を排除している、若者を排除している、という実態が存在しています。だとすれば、その仕組みを変えていかなければいけない。女性の意見を、あるいは、そもそも集落を相手にしてない若者の意見を、きちんとくみ上げ、吸い上げ、そして、行動に移すような仕組みを作り上げることが求められていると思います。「内発性」、「総合性・多様性」、そして、「革新性」を身にまとった「地域づくり」が、今や、各地で実践的に積み重ねられていると考えることができます。

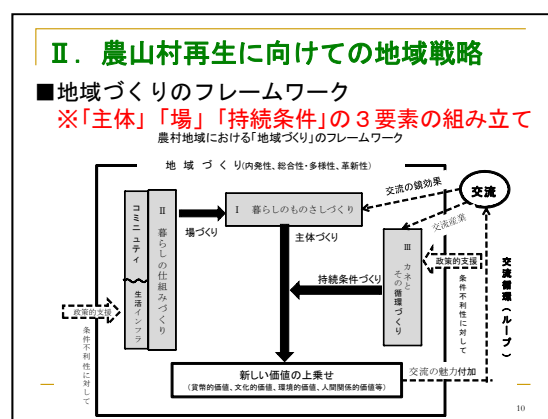
■地域づくりのフレームワーク

私自身は、この地域づくりに関し、十数年間にわたって全国各地を歩いてきました。高知県内でも、各地でお世話になっております。全国からお集まりの多くの皆さま方のところにもお訪ねいたしました。そして、得られた結論が、右の図です。

これは、最近の私の著作の中には、必ず入れるようにしている図ですが、全国各地の取組の中に学び、ほぼ確信を持っている地域づくりの全体像です。「地域づくり」の最終的な出口は「新しい価値を上乗せする」ことですが、それには「主体」、「場」、「持続条件」、この三つの要素が必要だということを示したものです。

何よりも必要なのは、『①主体づくり』です。地域づくりに立ち上がるような主体、主役を作っていくことが必要です。この主体、主役を作っていくためには、どうしても、今までのように後ろ向きな、あるいは、愚痴ばかり言っているのではなく、新しい価値観を地域の中でしっかりと持っていくことが必要になります。とは言うものの、「新しい価値観を持とう」などと言っても、地域の方々が動くものではありません。必要なことは、価値観という抽象的な言葉よりも、具体的な“ものさし”をつくり出していくことであります。そのものさしは、例えば、「この集落は人情に厚い」とか、「この料理はここがおいしい」とか、あるいは、「私はこの時期のこの風景が好きだ」というようなマイブームの景観といったもの、それひとつひとつが“ものさしづくり”であります。こういう“ものさし”があることによって、主体が生まれる、立ち上がっていくということです。

しかし、“主体”が生まれても、その主体が劇を演じる、踊りを踊る“舞台”がなければ、主体は生きません。その舞台づくりが『②暮らしの仕組みづくり』です。ソフト（コミュニティ）とハード（生活インフラ）がセットになったものが、『暮らしの仕組みづくり』だと考えています。「小さな拠点」というのは、恐らくこの仕組みづくりを新しいものにしていこうという考え方といえます。先ほど言いましたように、農山村の中には、確かに、従来型のコミュニティ、『集落』が存在しております。集落は守りに強い仕組みであり、そういう意味では、集落が崩壊するなどということはあってはなりません。集落があるからこそ、水路掃除ができ、道普請ができ、そし



て、何ととっても、地域資源がそれによって維持、保全されているということになります。しかし、これだけでは、一步、二歩踏み出すことはなかなか難しい。そういう意味では、このコミュニティは新しいコミュニティである必要があります。つまり、一方では、集落を守り、一方では、集落とは違う組織をつくる、という考え方が必要になるということです。そして、そういう方々の生活条件として、医療や教育は重要なポイントになりますが、現代社会ではモータリゼーションが発達していますので、最後の最後、生活インフラが維持されていれば、そこに医療や教育、買い物も含めて何とか持ちこたえられる“舞台”ができるだろうと思います。そういう意味で、暮らしの仕組みのソフト面でのコミュニティと、ハード面での生活インフラが整備として求められているということになります。

“主役”があって、“舞台”が生まれたわけです。しかし、この劇が、この踊りがロングランされるような、そんな持続条件が必要です。それが、『③カネとその循環づくり』です。先ほど申し上げたように、農山村は経済的条件が弱まっています。この部分が弱まることによって、地域づくりを果たすことができないという地域が生まれるとすれば、この『カネとその循環づくり』を精一杯成し遂げていくということが重要になってくると思います。

右図では、今申し上げたことを詳しく書いてあります。『暮らしのものさしづくり』については、何よりも地域の課題解決に対する当事者意識を地域の方々が持つことが重要です。そして、そのことによって、自らの暮らしをめぐる独自の価値観の再構築、すなわち『暮らしのものさしづくり』が必要です。実は、以前からこれは公民館運動として行われておりました。現在でも、公民館運動が活発に行われているところで地域づくりの機運が高まっているのはそうした背景があるのだらうと思います。そして、最近では、地域づくりワークショップ、いわゆる、地元学という手法が盛んに開発されて、全国的な動きとなっています。地域の資源を探し当て、それをポストイットでペタペタと地図の中に書き上げ、そして、それを見ながら、今後のことについて地域の方々全体で話し合うようなワークショップをやります。このようなことが「主体形成」、つまり、『暮らしのものさしづくり』のために必要です。

『場の形成』は、『暮らしの仕組みづくり』であって、コミュニティの再生、あるいは、生活インフラの整備が課題になります。

さらに、『持続的条件の形成』としては、公共事業に依存しないような地域産業の育成が必要になります。

Ⅱ. 農山村再生に向けての地域戦略

- ①主体形成（「暮らしのものさしづくり」）
 - ・ 地域づくりの最重要要素
 - = 地域の課題解決に対する当事者意識
 - 自らの暮らしをめぐる独自の価値観の再構築
 - = 「暮らしのものさしづくり」
 - ex. 地域の歴史・文化・自然
 - （郷土料理、景観、住民の人情）
 - ・ その契機
 - 1) 公民館運動
 - 2) 地域づくりワークショップ（地元学）

11

Ⅱ. 農山村再生に向けての地域戦略

- ②場の形成（「暮らしの仕組みづくり」）
 - 1) ソフト＝コミュニティの再生
 - 集落の位置づけが重要
 - 2) ハード＝生活インフラの整備
 - 医療、教育、生活交通等
- ③持続条件の形成（「カネとその循環づくり」）
 - 1) 公共事業に依存しない地域産業の育成
 - 2) 地域内再投資（岡田知弘氏）

12

■都市農村交流と地域づくり

こういう方向性が、全国各地の取組によって、今やはっきりと見え始めておりますが、この10年間、つまり、2000年代前半辺りから、それに加えて、もうひとつの取組が出てきました。それが「交流」、「都市農村交流」です。

都市農村交流は、実は私自身は『交流の鏡効果』と表現しています。都市から様々な方々が来て、「おばあちゃん、この料理おいしいね」とか、「本

当に綺麗なところですね」といったことを言うことによって、地域の方々は、どれだけ励まされるか。あるいは、その言葉によって、あらためて地域の資源を発見していきます。あたかも、都市から来られている方が、「鏡」のように、地域の宝を映し出しているのです。このことから、私はこれを『交流の鏡効果』と呼んでいます。先ほど、「地元学が重要だ」、「公民館運動が重要だ」と言いましたが、3番目の武器が今や、登場しています。それがこの「都市農村交流」です。

それに加えて、この「都市農村交流」は、それ自体が「交流産業」という一つの産業であります。きょうも四万十町、旧十和村の皆さま方、「十和おかみさん市」の皆さま方がいらっしゃっていますが、まさに、そこで行われているのは交流産業です。この交流産業という産業は、リピーター率が高いという特徴を持っている、特殊な産業です。経済的なパイが日本全体で縮小していく中で、地域産業の追い求める一つの方向性は、リピーター率を高めるということになります。これは実は、洗剤でも、ヨーグルトでも同じです。今までは人口増加に頼っていれば、ある程度の売り上げが可能だったわけですが、パイ自体が縮小していく中で、何よりもリピーターを確保するということが必要になってきます。その意味では、実は、交流産業は成長条件のある産業だと考えており、私自身は、国の成長戦略の中に都市農村交流が入らないのはおかしいと強く感じております。6月に公表される新たな成長戦略の中に、都市農村交流が盛り込まれるべきではないかと考えます。もしここに関係者の皆さま方がいらっしゃれば、そのような努力をしていただきたいと思います。

この交流が、交流産業として、カネと循環づくり、先ほどの持続条件づくりを高めていきます。この結果、新しい価値が地域の中にさらに上乗せされ、そして、魅力がさらに付加されて、交流自体も大きくなっていくという、新たな循環が始まるということでもあります。これを私は、「地域づくりの交流循環」という言葉で表現していますが、これこそが地域づくりを新しく側面的にサポートするような手法であると思います。

様々なところで主張しておりますが、このような意味で、都市農村交流は今や、戦略的な活動です。地域にとって、非常に戦略的な活動だと思います。したがって、いささか極端に、分かりやすく言えば、『都市農村交流庁』という、省庁の中の庁が必要だと言えます。これは、どの省のもとにつくっても構わないと思いますし、さまざまな省庁が共管でつくっても構わないと思いますが、そんな『都市農村交流庁』が農山村再生を支えるものであるというような流れになってほしいと強く感じています。

Ⅱ. 農山村再生に向けての地域戦略

■都市農村交流と地域づくりー二つのルートー

- 1) 交流の鏡効果→「暮らしのもののさしづくり」
 - ・都市住民が「鏡」＝農村の「宝」を写し出す
 - 農村サイド（ホスト）の再評価
 - 2) 交流産業→「カネとその循環づくり」
 - ・ホストとゲストの「学び合い」が付加価値
 - 高いリピーター率＝成長産業の可能性
- ⇒地域づくりの「交流循環」
- ・上記を通じて、「新しい価値」の更なる上乗せ
- ※都市農村交流は地域再生のための戦略的活動

13

Ⅲ. 新たな戦略としての「小さな拠点」

それでは、いよいよ、「小さな拠点」のお話をさせていただきたいと思います。まさに、「小さな拠点」は、この地域づくりの新しい戦略として生まれてきました。今、なぜ、「小さな拠点」なのか、あるいは、今、なぜ、新たな戦略なのか、このそもそも論から、少しお話をさせていただきたいと思います。

二つの向きが異なるベクトルが、日本の農山村にまさに生まれています。一つは、「2015 年問題」です。これは、この後、パネルディスカッションのコーディネーターをされている藤山先生が強調されている点であります。2015 年には、日本の農山村を支えてきた昭和ひとけた世代がほぼ 80 歳を超えるという状況になってきます。昭和ひとけた世代は 65 歳を超えるとリタイアするのではと言われていたのですが、非常にお元気な世代で、まだまだ地域で頑張っているらしいですが、さすがに、そろそろ疲れてくる、そんな時期を迎えます。その意味では、実は、地域の基礎体力は「下りのエスカレーター」に乗ったような状況になっています。しかも、それが加速化すると云えるのではないのでしょうか。地域づくりそのものとしては、「上りのエスカレーター」目掛けて、一生懸命、一步一步階段を上がっているのですが、しかし、あたかもエスカレーターのように、その階段全体が下がっているという、そういうイメージです。そんな「下りのエスカレーター」が加速化しているということでもあります。

しかし、一方では、皆さん方もお気付きのように、若者を中心とした田園回帰現象が非常に活発になっております。「大田園回帰の時代の到来」と言っても、決して間違っていないくらい、移住・定住の動きが活発化してきました。今日も、地域おこし協力隊がこの会場にたくさんいらっしゃるそうですが、地域おこし協力隊の現員は昨年 12 月の段階で実に 956 名であり、その後の採用もいらっしゃるでしょうから、今現在は恐らく 1,000 名を超えているような状況になっています。NPO 地球緑化センターが行っている「緑のふるさと協力隊」も、十数年間の活動の蓄積の中で、卒業生は全部で 600 人を超えています。この他に、「集落支援員」という仕組みもあります。あるいは、こういった制度や具体的な取組に乗らずに、地域の中で頑張っている方々もいらっしゃいます。だとすれば、いささか極端に言えば、2,000 人あるいは 3,000 人ぐらいの若者が、地域の中で様々な活動をしている状況になり始めているという可能性があります。

そういう意味では、今は「上りのエスカレーター」に乗り換える好機であります。エスカレーターは確かに、下向きに動いています。一方では、上りのエスカレーターの大きなベクトル、大きな力も作用し始めています。私たちは、こうした新たな段階での地域戦略こそが、「小さな拠点」だと考えています。今の比喻で言えば、実は、エスカレーターを乗り換えるための踊り場づくりが「小さな拠点」づくりに他なりません。全体としては確かに、下がり始めている。しかし、乗り換えることができるチャンスが生まれた。だとすれば、ちょうどデパートのエスカレーターのように、真ん中に踊り場をつくって、そこに上向きのエスカレーターに乗り換えることができるような場をつくっていくのが、「小さな拠点」というように理解してはいかがでしょうか。

Ⅲ. 新たな戦略としての「小さな拠点」

■なぜ、今「新たな戦略」か？－相反するベクトル－

①「2015年問題」(藤山浩氏)

・昭和ひとけた世代の完全リタイア

→加速化する「下りのエスカレーター」

②若者を中心として「田園回帰」の流れ

・移住・定住の動き

・地域おこし協力隊の現員＝976名

→「上りのエスカレーター」への乗り換えの好機

⇒※新たな段階の地域戦略としての「小さな拠点」

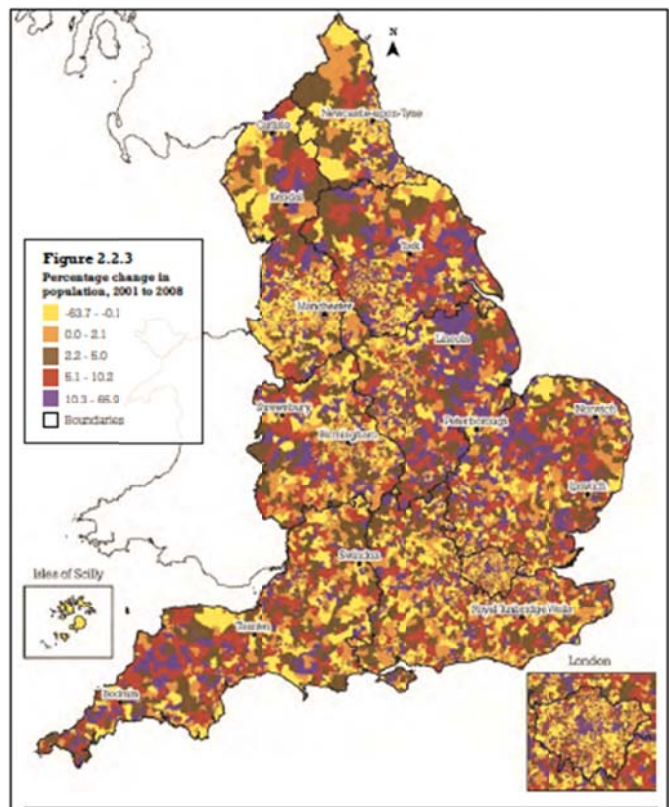
=エスカレータの乗り換えのための「踊り場」づくり

15

総務省のデータによれば、「地域おこし協力隊」は全国で318の都道府県・市町村の中で活躍しています。あるいは、今年の『中国新聞』の元日の1面トップに「里山・里海再評価の流れ ～豊かさ求め若者移住～」という記事が載りました。実はこの記事の最後に藤山先生がコメントをしておりますが、いずれにしても、こういう形で元日の1面トップにこういう記事が出るような状況になっているわけであります。

こういった大田園回帰の時代の具体的なイメージを、少し、イングランドを素材に考えてみたいと思います。当然、国によって条件は違います。私は、イングランドが理想の姿だということ言うつもりはさらさらありません。しかし、田園回帰が起これと、どういう状況になるのかということ、かの国から学ぶことができるわけであります。

イギリスは上にスコットランドがあって、北にアイルランドがあるわけですが、この中のイングランドの中で、人口の増減を表しているのが右図になります。黄色い部分が人口減少している地域です。黄色以外の所は人口増加している地域です。特に、このブルーの所は人口が激しく増加しています。英国自体は日本と違ってまだ年0.7%～0.8%の人口増加が見られますが、人口増減を見ると、国土全体がこういう風にまだら状態になるということにお気づきだと思います。日本で同じ地図を作れば、間違いなく、東京以外は真っ黄色（人口減少）になります。英国ではそうではなく、まだら状態になる、つまり農山村でも人口が増える所もあるし、減少する所もある。都市でも人口が減少する所もあるし、増える所もある。右下のロンドンの場合、ほとんど減少していませんがやはりまだらな状態になっています。



これが恐らく、大田園回帰の時代の具体像だと思います。つまり、どの地域でも人口増加のチャンスがあるということで、逆に言えば少し力を抜くと人口減少するかもしれないが、いつでも人口が回復する可能性がある、こういう状況が国土全体の中で生まれているのが、イングランドの状況であります。

イングランドの人々は、この美しい農山村が大好きです。右は平日に撮った写真ですが、Public footpathという、農場の中を通っている小道です。イングランドでは、農場の中を勝手に歩く通行権が認められています。そのため大変面白いことに、多くの農場でゲートの横に階段を用意してあります。農場のゲートを勝手に開けてしまうと、牛や羊が逃げてしまいますので、階段を使っ



て、そのゲートを乗り越えてくださいということなんですね。つまり、勝手に農場に入ることが権利として認められているわけですが、このように平日にぞろぞろ人が歩いている、こういう状況であります。まさに、これがイングランドの大田園回帰の時代であります。

そして、農山村に戻った人はどういう生活をしているのか。確かに、そもそも日本と違って、一極集中ではありませんので、農山村に入り込んだとしても、バスで1時間～1時間半の通勤で小都市に通勤するという姿が一般的ですが、なかには地域共同売店を開いて、マネジャーとして頑張っている方もいます。過疎化自体は激しく進行していないのですが、しかし、大きなデパートメントストアとか、あるいはさまざまな大規模店舗ができて、小規模店舗が撤退するという姿が一般的に見られるので、やはり、共同売店などが生まれているのですね。国立公園の職員を辞めて個人営業でカフェ兼売店を作っているもいます（右図の写真右側）。

大きな農場の屋敷を改造しているケースもあります。右図の看板の数だけ店が入っています。左下の写真の人は石屋さんで、右下の人はクラフト作家だったと思いますが、こういう形で地域の中でお店を開いていく方々も少なくありません。

これは実は公社が造ったものですが、「こういうのを日本では『小さな拠点』というが、こちらでは何というのですか？」と尋ねたら、「うーん、残念ながらまだ名前はないけど、『ルーラル・ハブ』とでも呼んでおこうか」という回答でした。そういう意味でまだ（仮称）なのですが、「ルーラル・ハブ」、これはまさに、「小さな拠点」だろうと思います。

■「小さな拠点」の意味

さて、それでは、この「小さな拠点」が何を意味しているのか。この実像は、後のパネルディスカッションで、あるいは、この後の事例報告で、皆さま方の前にリアルに、あるいは、重たい言葉で語られることになります。私は、その一つの前座として、論点整理だけしてみたいと思います。

そもそも「拠点」とは、「活動のよりどころとなる所」と『広辞苑』に定義されています。この「よりどころ」には二つの意味があると感じております。

一つは、ハード的なよりどころ、つまり、複数の集落、あるいは小学校区とか大字の中で、地域の空間の中心を明確化するというのが、「小さな拠点」の一つの考え方です。もう一方では、ソフト的なよりどころとして、新しいコミュニティをつくっていくとう意味で、むしろ『束ねる』と



Ⅲ. 新たな戦略としての「小さな拠点」

■「小さな拠点」の意味

①「拠点」とは？

「拠点」＝活動のよりどころとなる所（『広辞苑』）

<二重の意味>

- ・ハード的よりどころ
＝地域空間の中心を明確化
- ・ソフト的よりどころ
＝新たな地域コミュニティの創造
（束ねる＝ふるさと集落圏）

いう意味のよりどころになります。一点に集中するというよりも、よりどころとして『束ねる』という意味があるのではないのでしょうか。ハード的な意味での拠点、ソフト的な意味での拠点、この二重の意味を持っているのが、「小さな拠点」だと考えます。

問題は、「小さな」とは何なのか、ということでもあります。実は、この点こそ、今日のこのフォーラムの最大の論点でありまして、このために、藤山先生が新しい方法でのパネルディスカッションを後に準備しています。ぜひ、ご期待いただきたいと思いますが、「小さいからこそ」という哲学は、だいぶ以前に、シューマッハーという、ドイツからイギリスに帰化した英国人の経済学者が、「Small is beautiful」ということを言われました。そして、最近では、ご存じの『里山資本主義』、これは24万部売れている大ベストセラーのようですが、こういったものが、藻谷さん等から言われています。このように、「小さいからこそ」という哲学が生まれているわけであります。

後で議論されるわけですが、私自身は、新たな戦略としての「小さな拠点」で重要なのは、「小さい」の三段活用だと思っています。かつては、「小さくては」といわれました。規模の経済が盛んにいわれた時代には、「こんな小さなところではやっていられない」、「こんな小さな集落では何もできない」、あるいは、「こんな小さな市町村では何もできない」ということが盛んにいわれました。しかし最近では、そういった侮蔑意識はあまりないかもしれません。むしろ、「小さくとも」、こういった現在形の姿が一般的になっています。そして、未来に求められているのは、「小さくとも」ではなく、「小さいからこそ」という視点ではないのでしょうか。それはいったい何なのかという点は、繰り返しになりますが、後のシンポジウムでの議論に委ねたいと思います。

■新しいコミュニティの性格

さて、コミュニティについて少しだけ補足させていただきたいと思います。先ほど、小さなコミュニティをめぐる、集落との役割分担が必要だということを言いました。コミュニティを束ねて、「小さな拠点」をつくるということも、申し上げました。少し分かりづらかったと思いますので、今求められている「束ねられたコミュニティ」というのがどういう姿なのか、お話をさせていただきたいと思います。

新しいコミュニティの性格に求められるのは一つには「総合性」です。中国山地では、「小さな自治」とか、「小さな役場」という言葉を使っています。そして第二に「二面性」です。自治組織でありながら、経済組織の側面を持っているということです。経済組織というのは、共同売店やガソリンスタンド、高知県の「森の巣箱」、あるいは津野町ではレストランまで作られており、特産品開発を行うようなコミュニティとなっています。そして、最も重要なのは3点目の「補完性」です。集落と新しいコミュニティは補完関係に

Ⅲ. 新たな戦略としての「小さな拠点」

②「小さな」とは？

- ・「小さいからこそ」哲学の潮流
スモール・イズ・ビューティフル(シューマッハー)
里山資本主義(藻谷浩介氏)……
- ・「小さいからこそ」メリット
⇒パネルディスカッションへ

※『『小さい』の三段活用』を認識しよう！

「小さくては」→「小さくとも」→「小さいからこそ」
(過去形) (現在形) ((近)未来形)

21

Ⅲ. 新たな戦略としての「小さな拠点」

■＜補足＞新しいコミュニティの性格

- ①総合性(文字通り「小さな自治」「小さな役場」)
- ②二面性＝自治組織でありながら経済組織の側面も持つ(共同売店、ガソリンスタンド、居酒屋、特産品開発……)
- ③補完性(集落←＜補完＞→新しいコミュニティ)
 - ・集落・町内会＝「守り」の自治
 - ←→ 新しいコミュニティ＝「攻め」の自治
 - ⇒※集落と新しいコミュニティの重層化
(集落・町内会の代替組織ではない)

22

なっています。集落・町内会は「守りの自治」であり、新しいコミュニティは「攻めの自治」であります。なぜ、新しいコミュニティが攻めなのか。それは、女性や若者がそこに参加できるからです。そして、そういった方々と全員で新しい方向性をしっかりと議論できるからこそ、新しいコミュニティが攻めにつながっていくと考えています。この集落と新しいコミュニティを重層化していくということが重要になってきます。

そして、先ほど申し上げましたように、「革新性」も重要であって、それはまさに、集落の「1戸1票制」の限界を意識して、新たな仕組みの構築を企図するということが求められていると考えます。

このような、「小さな拠点」として束ねられた新しいコミュニティを、私は「手作り自治区」と呼んでおります。国交省では「ふるさと集落圏」という言葉を使っていると思いますが、いずれにしても、複数の集落を束ねて、そして、新しい攻めの対応をしていく、そして、その基には集落も元気で、守りの対応をしていくというイメージが求められていると思います。

■「小さな拠点」の機能

「小さな拠点」の機能を、右のようにまとめています。これは、皆さま方のお手元にある、昨年度まとめたガイドブックの中にも載っています。

「小さな拠点」には「守りの機能」と「攻めの機能」の両面が必要ですが、何といてもポイントは「攻めの機能」です。「守りの機能」は、確かに①ワンストップ拠点とか、②見守り・目配りの拠点、ということが必要ですが、それ以上に、①多世代の交流拠点であったり、②新たな人材の受け入れ拠点であったり、③人々の生きがい広がる場であったり、④地域の資源を生かし、地域の魅力を高める場であったり、といった「攻めの機能」が必要だということになります。

右の図では、「守りの機能」が上の二つの部分で、「攻めの機能」が下の四つの部分だと理解いただきたいと思います。

■「小さな拠点」の課題

では、「小さな拠点」にはどういう課題があるのかを、少しまとめてみたいと思います。実は、「小さな拠点」は、今後、活動が本格化するものであり、課題は少なくありません。例えば、「空間整備」と表現したハードの部分と「コミュニティ再生」と表現したソフトの部分とをどのように調和させるのか。ハード整備から入っていく事例もあるし、ソフトづくりから入っ

Ⅲ. 新たな戦略としての「小さな拠点」

④革新性

- ・集落の「1戸1票制」の限界を意識し、「新たな仕組み」の構築を企図

※新しいコミュニティ＝手作り自治区

- ・住民が当事者意識をもって、地域の仲間とともに手作りして自らの未来を切り開くという積極的な取り組み

23

Ⅲ. 新たな戦略としての「小さな拠点」

■「小さな拠点」の機能

<暮らしの安心を守る機能>＝**守りの機能**

- ①生活サービスのワンストップ拠点
- ②住民の見守り・目配りの拠点

<未来を拓く機能>＝**攻めの機能**

- ①地域内の多世代の交流拠点
- ②地域外の新たな人材の受け入れ拠点
- ③新しい地域の活動や雇用、人々の生きがい広がる場
- ④地域の資源を活かし、地域の魅力を高める場

24

Ⅲ. 新たな戦略としての「小さな拠点」



※大きな安心と希望をつなぐ「小さな拠点」

25

ていく事例もあると思います。多様なパターンがあるでしょう。しかし、まだ、このような多様なパターンを整理するには至っていません。今後、たくさんの事例を参考にしながら、整理することが求められていると思います。

それから、ハードの課題は、必ずしも施設を新たに造る必要はないのですが、既存の施設をうまく利用する場合にも、「複合性」が課題となります。ともすれば、単一省庁の補助事業を使うと、どうしても機能が複合化しないという問題が生じます。最近では、この問題は大幅に改善されていますが、その意味では、補助事業があったとすれば、その壁を乗り越えるような工夫が必要になると思います。また、集落と拠点間のアクセスをどのように実現するのかという点、これはまさに、「小さな拠点」のモニター調査事業の中でさまざまな地域がその実践を行っております。

そして、ソフトですが、これは大変重要な課題が残っています。集落と集落を束ねるというのは、これは皆さま方の体験からいっても大変難しいことです。なぜならば、かつて集落は独立王国、一つのまとまった存在でした。この集落同士がさまざまな協力をするということは、言うは易く、行うのは大変難しいことであります。その点で、これを「束ねる人材」が重要になってきます。当然、「束ねる人材」となるひとつには、市町村の現場職員があげられますが、市町村合併の影響もありなかなかそういう力が働かないとすると、特にどの集落にも利害が存在していない外部人材を活用する場面があるだろうと思います。地域おこし協力隊が活躍するというのも、こういう背景があるのだろうと考えております。

IV. おわりに

さて、最後にまとめてみたいと思います。今申し上げたように、「小さな拠点」は新しい試みとして、高知県を先頭に、全国で始まっています。そのために、様々な課題が存在しています。しかし、もう一度原点に戻って考えてみたいと思います。「小さな拠点」自体は、「地域づくり」でありました。この「地域づくり」が、様々な新しい要素の中で、新しい戦略が必要だということ で生まれたのが「小さな拠点」でした。だとすれば、「小さな拠点」は『手段』であります。「小さな拠点」を『手段』としっかりと捉えて、その本質は「地域づくり」だということを、私はもう一度、肝に銘じるべきだと思います。

和歌山県のある地域リーダーが1ヶ月前、私にこんなことを言いました。「仕事や空き家が流動化しないから、若者がこの地域には来ない」と言う行政担当者に対して、「地域を好きになったら、若者は自分で仕事を探し、作りだす。そんなことではなく、どれだけ魅力的な地域を作れるかが問題だ」と彼は言い放ちました。つまり、空き家探しや仕事づくり、これさえも一つの『手段』であるということです。そして、「小さな拠点」づくりも一つの『手段』であります。そういう意味では、この原点のところ、すなわち、地域が好きになるような、そんな地域をつくりだしていくことにこそ、「小さな拠点」の原点があり、ポイントがあると理解したいと思います。

どうも、ご清聴ありがとうございました。

Ⅲ. 新たな戦略としての「小さな拠点」

■課題

- ①ハード(空間整備)とソフト(コミュニティ再生)の調和
- ②ハード(空間整備)
 - ・施設の複合性(補助事業の「壁」)
 - ・集落－拠点間のアクセス
- ③ソフト(コミュニティ再生)
 - ・「束ねる人材」が重要
 - ・「利害フリー」の外部人材の活躍場面

4. 事例報告

(1) 高知県四万十市（大宮集落活動センターみやの里）

発表者：竹葉 傳（大宮地域振興協議会 会長）

皆さん、こんにちは。小田切先生の後に、妙にやりにくいんですけども、お許しいただきたいと思います。



1. 大宮地域の位置と概要

今日のフォーラムのパンフレットの表紙に使っていただきました写真は、大宮地域を上流から見たものです。真ん中に四万十川支流の目黒川が流れておりまして、一番奥に見えるところが、大宮産業、大宮集落活動センターです。

右図は大宮地域の図面です。去年の8月に41度を記録した地域です。

大宮地域は、上・中・下という三集落で形成されておりまして、現在、人口が約300人弱という集落です。その集落を維持するためには、集落の自治会長さんの区長さんが3人おり、さらに公民館活動ということで、分館長さんがいます。小学校は平成22年に休校になりました。現在大宮地域にあるのは、郵便局、診療所、ライスセンターです。



■「株式会社 大宮産業」の設立

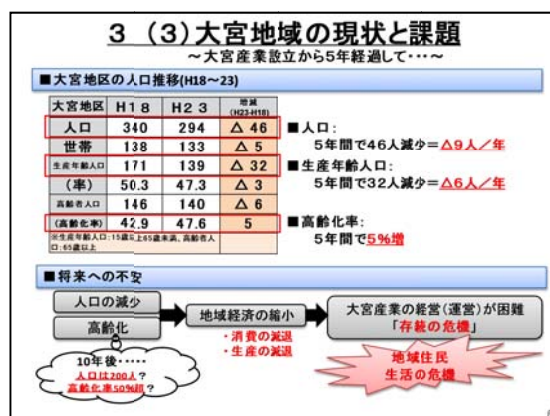
大宮産業の設立ですけれども、平成16年に幡多地域の農業協同組合の中で14ヶ所の農協が廃止されるという話を受けまして、平成18年の5月まで存続運動をやってきました。その間、「株式会社を創るので、皆さん、参加してくれませんか」とお願いしましたところ、地域住民の8割以上の方が賛成をしてくれまして、現在、108戸で700万円の出資金で、『株式会社 大宮産業』を運営しております。県道8号線の左側に大宮産業の店舗と給油所があります。

■大宮産業の取組

大宮産業の発足と同時に、アドバイザー会議をつくりまして、年に2～3回会議をしています。小学校がなくなり、集まる機会が少なくなったため、交流イベントとして、土曜夜市（2回）や感謝祭（花の市）を現在行っております。

■大宮地域の現状と課題

大宮地域は、昭和30年ごろには1,000人の人口がありました。でも、現在は高齢者率が47%で、年間の人口減少が約9名となっています。先ほどの知事の説明にもあったように、生産年齢人口も1年間に6人ぐらい減っています。人口が減少しながら、高齢化は高くなるという中で、将来どうするかという不安が生じております。あと10年もすれば、人口は



織にとらわれず参加できるワークショップを開き、最後に、世帯主の皆さんにご案内しましたところ、最終的には100人くらいは来てくれて、ワークショップを開いております。これも、高知県の地域支援企画員の皆さんにお手伝いいただきながら開いていきました。

■大宮地域振興協議会の設立

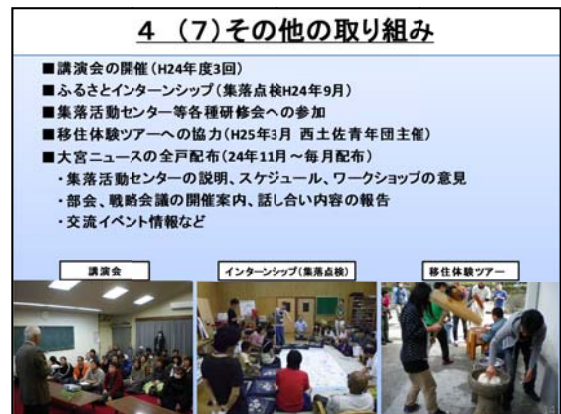
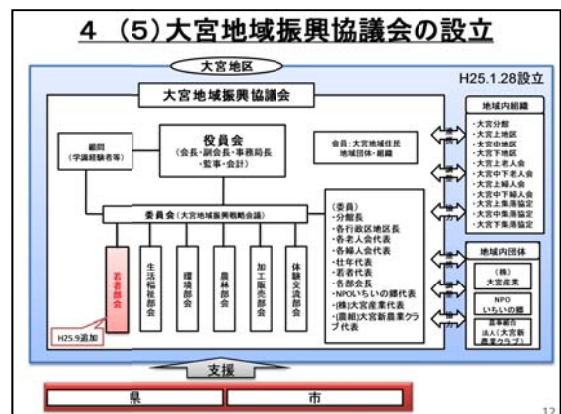
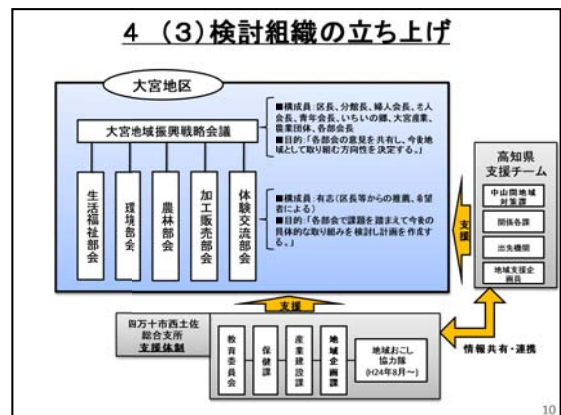
このようにワークショップを開いて集約していった問題をどうするか。最初は、五つの部会の中でまとめるのではないかとということで、行政の中でも、地域企画課・産業課・保健課・教育委員会と、各部会に関係のある方と、高知県の皆さんにもご協力いただきながら、検討組織をつくりました。なお、現在は6つの部会ができております。

ワークショップでは、「不安」、「良いところ」、「今後やりたいこと」について、合計600余りの意見が出てきました。その意見をそれぞれの部会に当てはめていきました。そして、例えば加工販売部会では、加工品を作る、手芸品を作る、わら細工を作るとか、体験交流部会ではいかにして高知市内や他地域から来ていただくかを検討するとか、具体的に話し合い、集落活動センターの活動に取り組んでおります。

各部会の構成は、分館長、区長、クラブの会長といった各組織の方に集まっています。部会を開くときには、高知県の地域支援企画員や市役所の担当課の方も出席してくれます。現在、週に3回ぐらいは部会を行っています。

集落活動センターの取組の主体は大宮地域振興協議会で、その中に「みやの里」を作りました。取組としては、①安心サポート、②生活の支援、③集落の活動など9つありますが、今はまだ全部は行っておりません。1年間のスケジュールの中でできること、要はお金の掛からないことからどんどんやっいていこうということで、進めています。

その他の取組としては、現在3年続けてインターンシップの方を受け入れています。というのは、私たちのように生まれてからずっと大宮にいる者には分からない、地域外から見た目が必要だからです。また移住体験ツアーや、集落での集会に小田切先生はじめあらゆる先生に来ていただき、戦略会議を練りながら、集落づくりを進めております。



■大宮集落活動センター「みやの里」の開所

去年の5月25日に、「大宮集落活動センター みやの里」を立ち上げました。ちなみにうちは看板は掛けずに立てております。ちょうど立ち上げる前の時間に、小田切先生に来ていただいて、「おまんらはいけんじゃないか。もうちょっと愛情かけて地域づくりをやれ」というような講演会をしていただきました。またちょうど知事が空いた時間に来てくれて「みやの里」の立て看板を立ててく

れました。大宮地区は米ナスの産地なので、看板の上にはナスの葉玉をつけています。

体験交流部会では、取りあえず田植えの体験をやろうということで、6月9日、ちょうどその日は雨でしたけれども、高知市内の県立大学の方から20人ぐらいと、一般の方10名、35～36名、地元を含めて、60名の方が来てくれました。私たちは、手で植えるのがいいだろうと思っていましたが、やはり女の子は田植え機にも乗りたいということで、田植え機も使いました。なかなか真っすぐに植えてくれています、これは指導が大変だったらしいです。午前中に田植えは終わり、その後交流会をしました。本当は皆さんと一緒に釜飯を炊いて召し上がってもらおうと計画しておりましたが、やはり若い人からお年寄りまで一番ふさわしいものはカレーだろうと思ってカレーにしました。ところが、カレーはもう本当に不評でした。せっかく大宮へ来ていただいたのに、大宮米の味がカレーの味で消えてしまったのです。最後に残った、釜で炊いたおこげは良かったです。これは大好評でした。次からはもうカレーはやめようという話で、きょうも加工課長が来てくれています、今年はもう少し釜を増やしてやろうということにしております。

販売部会では、7月1日から、地域の各家庭で作った野菜の良いものを出そうということで、今は毎日、ふるさと市で出しています。朝収穫し、集荷し、配達するという形をとっています。加工部会の皆さんもいろいろ模索をしてくれています。林野庁から竹林整備を請け負い、去年の11月から4年計画で整備を行っています。その中で切った竹を、体験交流などでお出でいただいた方に出すお弁当の「折り」の代わりに使えないかと思っています。その他、お菓子作りや料理の講習会もやっています。また環境部会では、去年コスモスを3町ぐらい蒔きました。そういうことをやりながら、一生懸命、地域づくりに取り組んでいます。

右は大宮地区を下流から上流へ向けて撮った写真です。右奥に見えるのが郵便局と診療所です。この診療所は、今、週に2回しか医者が来てくれておりませんので、医師住宅を集落活動センターが借り、第二研修所として、夏場でしたら20人ぐらい泊まれるようにしています。ぜひ、皆さん来てください。使用料はいただきます。また来月に入ると民宿の許可が下りるので、民宿をしながら、田植えや稲刈りの体験をしていただくということも計画しておりますので、ぜひ、よろしくお願いします。ご清聴ありがとうございました。



（２）島根県隠岐の島町（社会福祉法人ふれあい五箇）

発表者：池田 眞理香（社会福祉法人ふれあい五箇 施設長）

皆さん、こんにちは。荒海の日本海と穏やかな瀬戸内海を乗り越えて、初めて高知県にやってきました。昨年、世界ジオパークに認定された、“世界の隠岐の島”からまいりました、ふれあい五箇の池田といいます。今日はよろしくお願いします。



1. ふれあい五箇の概要

「ふれあい五箇」は、島の一番北側、今話題の竹島に一番近い旧五箇村にあります。旧五箇村の「五箇」を残そうということで、地域の皆さんから名前を付けていただきました。

隠岐の島は南側にいろいろな建物が集まっています。フェリーの発着する港も、空港も、役場の本庁も、大きな総合病院も、ショッピングセンターも、図書館も、文化センターも、全て南側にあります。ですので、人の流れは大体、全部、南に集まるようになっていきます。ところが、お年寄りや、片道 30 分もかかるのに、北へ北へと、「ふれあい五箇」へと流れてきています。おかげで、旧五箇村で社会福祉協議会のデイサービスとして始めたときには 15 人の定員だったのが、25 人になり、35 人になり、今や 50 名定員で、隠岐の島で一番大きいデイサービス事業所となっています。



「ふれあい五箇」は、「無理です」「駄目です」と言わない、「断らない福祉」を目指しています。誰もが住み慣れた地域の中で、当たり前のように暮らしていける社会の実現がやはり一番幸せなことだと思っているからです。私たちは、そういう思い、志を持ってやっております。

なぜそういうことを始めたかといいますと、例えば、「今日は風邪気味だからお風呂に入れないのでデイサービスは休みますが、代わりに明日利用することができませんか？」という方が、お年寄りの中にはかなりおられると思います。そのときに「あなたは月・水・金が利用日のプランになっていますので、明日は利用はできません」などと言っていたら、仮に土・日を休みにしているデイサービスだったら、月曜日まで何日もお風呂に入れないという状況が生まれてくるではないですか。ふれあい五箇は土曜日も、日曜日も、祝日も、365 日やっているので、「じゃあ明日、体調良かったら来てください」と言うことができます。

「急に家族が留守になったので、お昼ご飯を配食してもらえませんか？」という電話もよくかかってきます。そういうときも、本来なら、町の補助事業なので、町に申請し、町の印鑑が押してある申請書がなければ駄目です、と言うところですが、今日の昼ご飯が欲しいと言っているので、書類は後でもいい良いことにする、という対応をとっています。

また、「本土の方で不幸があって、どうしても 1 日、隠岐を離れなければいけないが、お年寄りが居るので、何とかならないでしょうか？」という相談もありますので、今話題の「お泊まりデイサービス」も介護保険とは全く別に、ふれあい五箇の独自事業としてやっています。お年寄り

になじみの場所で、なじみの職員が、その方の希望する「1泊」を急遽受け止めることができる。勤務をやり繰りして、男性の利用者さんの場合は男性の職員が、女性の利用者さんの場合は女性の職員がお泊まりをするようにしています。

こうのように、地域の皆さんの希望や、利用者さんの要望をひとつひとつ取り上げて、実現していく中で、今のような多彩な内容のデイサービスとなりました。最初から、これをやろうとしてきたわけではなくて、結果としてやってきたことを振り返ったら、そういう姿になっていたというのが、本音のところでは。

2. 職員の働き方の合わせ技

これができた背景には、実は職員の働き方の「合わせ技」があります。左上のゲームをしている利用者さんの中には、若い男性がおられます。この方は高次機能障害の方たちです。左下は、パワーリハビリといいまして、機能訓練の機械を使って、筋肉や神経の連携を滑らかにする機能訓練を行っています。実は、これと同じ機械がヤンキースのイチローのところにもあります。多分イチローはマックスの負荷でやっていると思いますが、うちのお年寄りさんは、一番低い負荷で、お風呂に入れる方なら誰でもできるという形で使っています。そしてこの操作をしている男性の職員は、昼間はパワーリハビリを担当していますが、火曜日の午後はカラオケ班を担当して、お年寄りと一緒に、『北国の春』をうなっております。

ちなみに、ふれあい五箇では、男性の職員採用に枠があります。隠岐高（県立隠岐高等学校）野球部枠、隠岐水（県立隠岐水産高等学校）相撲部枠、イケメン枠。皆さん、「隠岐の海」という力士を知っていますか。「隠岐の海」は隠岐水相撲部の卒業生です。隠岐水相撲部枠は気は優しく力持ち。そして、誰よりもおばあちゃんが好むのは、イケメン枠です。おじいちゃんが若い女性を好むのは誰も納得されると思いますが、おばあちゃんは若い男性が大好きです。

右上は、廃油せっけん作りです。これはふれあい五箇が最初から取り組んでいる活動です。揚げ物を作ったして出る廃油と苛性ソーダを混ぜてせっけんを作り、どんと祭りなどで販売しています。この他に、牛乳パックもボランティアの女性の団体の方と一緒に処理作業をしています。

右下の写真は、「おでかけ班」です。隠岐の島には壇鏡の滝という秘境があるのですが、そこに行ってお茶をしているところです。さきほど高次機能障害の方の話をしてしまいましたが、若い働き盛りの男性が脳出血とかで倒れてまひが残ってしまい、色々な活動をしているということで紹介されて「ふれあい五箇」に来られます。そのグループの活動が「おでかけ班」です。「おでかけ班」は、脳が喜ぶことを意識して、色々なことに取り組んでいます。喫茶店に出掛けたり焼き肉を食べに行ったり、本土に行く日帰り旅行も計画していると聞いています。

そして、これが「ふれあい五箇」の目玉になりますが、さまざまな市民活動あります。利用者さんの「あれもやりたい」、「これもやりたい」という意見を聞いておりましたら、なんと今では活動が8つにもなってしまいました。講師の皆さんには、隠岐の島町でもその道のプロ、専門家の方に講師料をお支払いして来ていただいています。活動には、必ず担当の職員がつき、一緒に



やっています。実は、私も習字クラブの担当でして、木曜日の午後からは書に向かっていて、皆さんのやる気を引き出しながら、習字に取り組んでいます。

陶芸班もありますが、実は、五箇地区には公民館の陶芸活動がないので、地域の中からも「ふれあい五箇の陶芸の活動に参加させてもらえないか」というような声が出てきているところです。また木工班は、元大工の方に指導していただき、片手はまひがあっても片手でのこぎりを使って、工夫しながら作業ができています。園芸班の先生は、実は私の中学校時代の恩師です。もともと「ふれあい五箇」を利用し始めたときには車いすだった方ですが、だんだん力を発揮されまして、園芸班の活動ではいきいきと指導されています。

こうした趣味の活動のほかでは、365日行っている配食サービスがあります。これは、地域のボランティアの方々にとても力を発揮していただいています。民生委員や元教員の人、元公務員の人、そういう方が皆さん自分のできるときに、月1回の方もおられますし、週1回の方もおられますが、それぞれ持っている力を発揮してくださっています。もちろん、職員もデイサービスで利用者さんをお送りしながら、お弁当も置いて帰ってくるというような合わせ技をしています。

配送サービスは、ヘルパーさんによる移送サービスですが、バスよりも少し高いですが、タクシーよりは格安なので、大変喜ばれています。また子ども祭りは18回を数えます。これは、地域の皆さんのほか、小中学校の生徒の皆さんがボランティアとして参加して下さり、そして、そうめん流しのさおを作るのは地域の青年団、お椀を作ってくれるのは老人クラブのお年寄りさん、というように、皆さんができる力、いろんな力を発揮してやってくださっています。

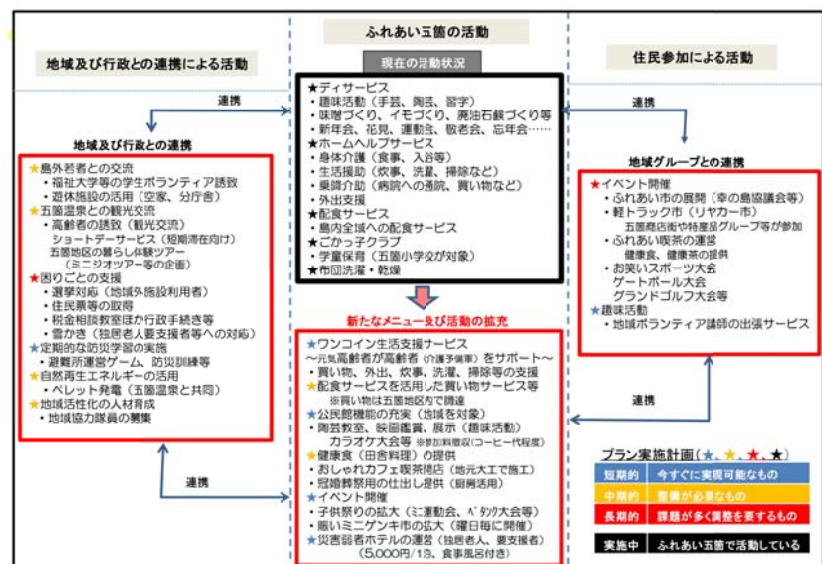
3. これからどういうふうに踏み出そうとしているか

このように、今までやってきたことを振り返ると、実はそれが「小さな拠点」だったということですが、では、これからどういうふうに踏み出そうとしているかということについてです。

この「小さな拠点」づくりモニター調査に取り組む中で、初めて地域の方にアンケートをさせていただきました。そして、交通弱者や買い物弱者といわれる方々の将来の不安とか、「いつ店を閉めようか」と思っている地域の小売店の方々の思いを受け止めて、「ふれあい五箇」として、今まで頑張ってきたことを生かしながら、今後、具体化していきたいと思っています。

今回、国土交通省の「小さな拠点」づくりモニター調査に取り組まさせていただいて、自分たちのやってきたことを振り返り、見つめ直すことができ、また今後は地域の皆さんと一緒に体制を構築していき、活動を深めていくことができのではないかと考えています。本当にありがとうございます。感謝しています。以上です。

小さな拠点づくり プラン(案)



（３）広島県三次市（川西郷の駅づくり推進委員会）

発表者：平田 克明（川西郷の駅づくり推進委員会 委員長）

皆さん、こんにちは。ご紹介いただきました平田でございます。馬鹿は風邪をひかないといわれますが、ちょっと先般風邪をひきまして、近くの名医といわれている伊藤内科に行きました。「どっか痛うないか？」って言われたんで、「のどが痛いです」って言いましたら、「喉元過ぎればって言いますから２～３日すれば治りますよ」と言われましたが、１週間経ってもまだ治っておりません。お聞き苦しくて誠に申し訳ございませんが、よろしくお願い致します。



今、二つの事例がございましたが、それは既にできている拠点に、さらに新しい、色々な価値を付加しようというような事例発表で、大変参考になりました。我々は、これから全く新しく拠点を作っていくという事例ですので、その辺のところを発表したいと思います。

１．川西地区の概況

三次市は中国山地のほぼ中央部にございます。人口密度は 31 人/㎢です。左の写真は高い所から見た川西地区の集落であり、中央の写真が冬の景色です。美波羅川という川が流れております。右は集落の神殿入(こうどなり)という夏のお祭りでございます。多くの方でにぎわいますが、最近が高齢化、人口減少で祭りそのものも、なかなかやるのが難しい状況になってございます。



そして、三次市は霧の町で有名ですが、ただ、毎日見られるということではございませんで、見られたときは、それは「運がいい」（≒雲海）みたいなところでございます。



今、川西地区では色々なイベントをやっているのですが、その一つが、10 年前に廃校になった、私の卒業した学校を利用して、先ほど、小田切先生からお話がありました「都市農村交流」として毎月色々な交流活動を行っております。現在、年間で大体約 4000 名の方にこの施設をご利用いただいております。昨年からは民泊の許可もいただいております。なお、私の農園（平田観光農園）は、果物を使った交流施設ということで、年間大体 15～20 万人の方々が訪れて下さり、果物を使った、色々な交流体験をしております。



■川西地区のこれまでの取組

川西村は、1985年に三次市に合併しました。そして平成3年には小学校が廃校になりました。人口は昭和35年は3,500人だったのですが、現在は3分の1の1,200名にまで減少しております。何とかしなくてはいけないということで、平成18年に自治連合会で『まめな川西いつわの里』づくりビジョン」を策定しました。

その後、JAの支所もなくなり、Aコープもなくなって、川西地区に17あった商店が全てなくなってしまいました。そこで、その「いつわの里づくり事業」の中心地であった「まるごとミュージアム」を形にしていこうということで、基本構想を作りました。まずは実験的な取組として、軽トラ朝市を月1回で行っております。平成23年には、川西地区の拠点整備検討会を行いまして、専門のコンサルタントと共同で色々な資料を作りました。2012年には、川西小規模多機能介護施設を造っていただきました。

そして、平成24年6月に、川西郷づくりビジョン推進委員会を発足し、その中に組織運営部会・サービス部会・物販部会を立ち上げました。その後は、先進地を視察しようということで、2ヶ所の先進事例を視察し、昨年の9月にこの「小さな拠点」づくりモニター事業に採択していただいたということでございます。

■「小さな拠点」の検討場所

右の図が「小さな拠点」の検討場所で、郷の駅の構想の検討地がその中心部にある所でございます。具体的な場所としては、国道375号線に沿った地域で、今、ここで軽トラ朝市とさわやか市をやっています。さわやか市は、地元のおばちゃんたちがやっている市で、お餅などの加工食品を扱っています。さわやか市と軽

年表／現在までの取り組み

- 1958 (昭和35) **双三郡川西村 → 三次市に合併**
- 2003 (平成15) **上田小学校廃校**
- 2003 (平成16) 川西自治連合会 発足
- 2006 (平成18) **まめな川西いつわの里づくりビジョン**(川西自治連合会) 策定
- 2007 (平成19) **JA三次 川西支所 廃止**
- 2009 (平成21) **Aコープ かわにし店 閉店**
- 2009 (平成21) **「(仮称)農村まるごとミュージアムいつわの里広場」基本構想**作成
- 2010 (平成22) **軽トラ朝市(実行委員で月1回) 開始**
- 2011 (平成23) **川西地区拠点整備検討資料** 作成 (専門コンサルタントとの共同研究)
- 2012 (平成24) **川西小規模多機能介護施設 開所**
- 2012 (平成24.6) **川西郷の駅づくり推進委員会** 発足
- 2013 (平成25.1) **三部会(組織運営・サービス・物販)** 発足
- 2013 (平成25.3) **講演会「故郷の未来と『郷の駅』～中国山地の現状から～**
(平成25.3) **先進地現地調査「美山ふれあい広場(京都)」「鯉ヶ窪(岡山)」**
(平成25.9) 国土交通省 **集落地域における「小さな拠点」づくりモニター調査**
地域に選定される

「小さな拠点」検討場所

平成18年3月策定 まめな川西いつわの里づくりビジョン



右の図は郷の駅の構想図です。先の二つの事例発表と同じく、直売所や食料品などの店、みんながくつろげるような場所、ATM などをつくって、地域に住む住民の方にとって非常に便利なおところになるようなものをつくっていこうというのが、この郷の駅の構想図です。



夜もやったらどうかということで、夜、軽トラ晩方市を行いました。しかし、こともあろうにどしゃ降りで、これでは人は集まらないだろうと思っていましたが、予想以上にたくさんの方にお集まりいただきました。そこで、もう一度天気の良いときにやろうということで2回目も行いました。そのときにも大変多くの人においでいただきました。参加していただいた住民の方々も、ぜひ、またこういった「小さな拠点」ができれば参加してみたいという意向でございました。皆さんの意向がよく分かりました。

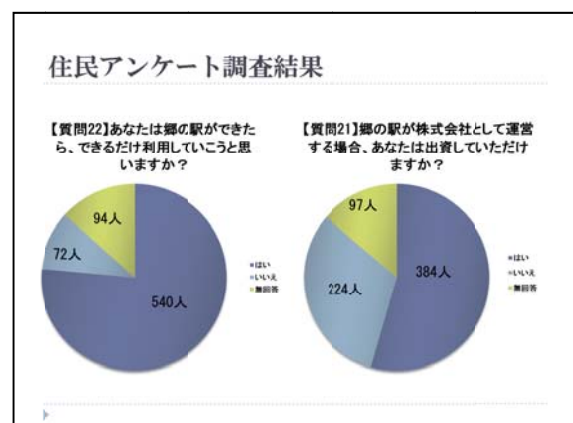


④また、試行的な取組(2)として、婦人グループによる郷土食の掘り起こしを行いました。「小さな拠点」では、「食の玉手箱」ということで、今後女性の方によるバイキング料理のレストランをつくろうと計画していますが、そのための郷土食の研究を今から行っているところでございます。

⑤ワークショップは5回ぐらいやっております。地元で、どのようなものを販売していくのか、どのような形態で販売していくのかということについて、ワークショップを行っています。

⑥先進地調査として、先ほど発表されました大宮産業や、北郷など4ヶ所の視察をしました。例えば、神石高原町というところにある道の駅が非常に賑わっていて経営的にも黒字になっているということで、ぜひ、それを見てみたいということで視察しました。そして、アンケート調査を行ったところ、住民の70%がコンビニが欲しいという要望だったそうで、その結果、ここにコンビニが入り、それが非常にプラスに働いているということでした。コンビニの他にはATMが欲しいという意見が多かったそうです。

⑦住民アンケート調査の結果、約700人からの回答がありました。「あなたは郷の駅ができれば、できるだけ利用しようと思っておりますか？」と聞くと、77%ぐらいの方が「利用したい」と回答されました。それから、「郷の駅は株式会社として運営しようとしているが、あなたは株式会社に出資していただけますか？」と聞くと、65%は「出資したい」という意向でした。さらに、「あなたは、郷の駅の事業に直接関わってみたいと思いませんか？」という問いには、7割近い方が「ぜひ関わってみたい」と回答されました。また、「郷の駅で仕事をしてみたいですか？」という問いには「はい(仕事をしてみたい)」という方が65%ぐらいおられました。それから、郷の駅で、例えば草を取るとかトイレ掃除をするといったボランティアをしたかという問いに対しては、やはり6割近くの方が「ボランティアとして働きたい」という意向でした。



3. 「小さな拠点」づくりモニター調査の成果

全体的な成果として、この調査により住民の要望がきめ細かく把握でき、実現に向けた優位順位が確認できました。先ほど申しましたように、コンビニだとか、ATMだとか、直売所だとか、地域の燃料だとか、そういったニーズが非常に強かったわけでございます。また、行政との連携作業により、実現に向けて大きく前進できたということで、行政の方々と一緒にこの事業を検討してまいりましたので、行政においても、ぜひ、これを実現したいという意向を確認することができたと思っております。

それから、各部会の成果についてですが、まず組織運営部会では、地域住民の多様な意見を集約する中で、できるところから、小さいところからやっていくという方針が固まったことが挙げられます。また、今後、若い人や女性を含めた多様な人材で準備室を作り、発起人会という取組体制を作っていきたいと考えています。サービス部会としては、アンケートの結果や地域の実態を基に、郷の駅に求められるサービスを摘出することができた点や、他部門との連携の下にさらに詳細な調査を要する事項が明らかになったという点が成果として挙げられます。物販部会としては、3回にわたるワークショップと現地調査を通じて、地域住民のニーズが高いコンビニと産直の様々な形態や可能性を検討することができたということが成果でございます。

4. 「小さな拠点」づくりに向けた今後の展望

今後の展望ですが、これから実現に向け計画を進めていくわけですが、今回のモニター事業ででき上がった計画を実現するためのアクションプログラムが明確でないために、まだまだ、住民の方々にとっては、不透明感というか、不安が残っています。したがって、「小さな拠点」を実現するためのサポートシステム、「人」・「モノ」・「金」を、今後とも行政には期待したいです。特に我々はこれから「小さな拠点」をつくるため、初期段階、立ち上がるまでの支援が特に必要であると思っています。

それから、「小さな拠点」の建設後の運営ですが、地域住民が総力を挙げて、独自にその運営を行っていきます。様々なニーズがありますが、小さなことから取り組み、成功事例を重ねながら、少しずつ、できることから取組を拡大していきたいと思っています。

先ほどお話があった2つの地域とは違い、我々はこれから全く新しく拠点となる場をつくっていかうという取組ですので、非常に不安も多いですが、行政的な支援も含め、先ほどお話ございましたように、地域外の人の方々の色々な意見も入れ、我々ができることから徐々に進めていきたいと考えております。

ご清聴どうもありがとうございました。

5. パネルディスカッション 『「小さな拠点」がつなぐ手作りの地域運営』

コーディネーター：藤山 浩（島根県中山間地域研究センター研究統括監）

パネリスト：竹葉 傳（大宮地域振興協議会 会長）

池田 眞理香（社会福祉法人ふれあい五箇 施設長）

平田 克明（川西郷の駅づくり推進委員会 委員長）

藤井 健（国土交通省 大臣官房審議官（国土政策局））

【はじめに】

■「小さな拠点」づくりフォーラムの意義

藤山 皆さん、こんにちは。非常に充実した、そして、楽しい雰囲気の中で進んでおりまして、あと70分で終わるのが惜しいぐらいです。この後半の70分は、この「小さな拠点」をこれから実際につくっていく、動かしていくときの合言葉になるようなキーワードをみんなで探していくようなパネルディスカッションにできたらと思っています。



冒頭、知事のご挨拶にもありましたが、過疎化が続いて50年が経っています。この半世紀は、どちらかというところ「規模の経済」というか、大規模指向で、大きいことは良いことだとされ、いろいろと集中化させて物事を進めてきました。その結果として、今や、集落地域だけでなく、この高知市でもそうでしょうが、団地やマンションにも高齢化の波が押し寄せているという状況になっています。私は、こういった、いわば、地域を使い捨てていくような先には、それぞれの地域にも、あるいは国としても、未来はないと思っています。藤井審議官のご挨拶にもありましたが、やはりそうではなくて、この国土も、そして、それぞれの地域の暮らしもしっかりと支えていく、いわば、小さな細胞のような地元を取り戻していかないといけないと思っています。そこに生き生きとした力とつながりがもう一度宿るようにするために、実はこの「小さな拠点」が非常に大切な意味を持っていると思っています。

幸い、日本という国は、ひとつひとつの地域に驚くほど多彩な味わいがあり、色合いがあります。私も高知県のアドバイザーをしています。高知に来る度に、「ここにもこんな暮らしがあるんだ」、「こんなおいしいものがあるんだ」、「こんな頑張ってる人々が居るんだ」と発見します。そういう多様性こそ本当は我々の生命線ではないかと思っています。

先ほどの小田切先生のお話にもありましたが、私は特に中国地方を専門に見ていますが、この3～4年で、実は、山間部や離島に若い世代の数が少し増えているようなところが目立ち始めています。日本にも、田園回帰が始まりつつあるという新しい風の吹き始めも感じているところです。

さて、そうした中で、この全国フォーラムの第1回が、まずここ高知県で開催されるということには、実は非常に意味があると思っています。冒頭、知事の素晴らしいプレゼンがありましたが、高知県はいち早く、集落活動センターという、いわば県版の「小さな拠点」のお手本になるような形の取組を、縦割りではなく進めています。また、実は私、高知県を回らせてもらっていて、先日新しい発見をしました。この写真は「区長場」と言います。これ

は土佐清水市で見つけたものですが、実はこれは市の施設ではありません。地域の代表で区長さんがいらっしゃる、いわば、事務所なのですが、市の施設ではないので、例えばお米を売っていたり、みやげもの屋があつたりするんですね。こういう合わせ技もやっている。本当に小さな事務所ですが、そういった合わせ技の中で、事務職の方を雇っています。もちろん行政も一緒に助けていますが、こういった「小さな拠点」のルーツも高知にあったということも学ばせていただいています。そういう高知県、古くて新しい「小さな拠点」を、まさに実践されている中でフォーラムを開催するのは、非常に意味があることではないかと思います。

■パネルディスカッションの進め方

藤山 さて、きょうのパネルディスカッションですが、

それぞれのテーマ、論点ごとに、それぞれのパネリストの方に「この言葉をまず伝えたい」、「こういうことを合言葉にしたい」というキーワードを書いていただいてから、その後、1～2分でご説明していただくという形にしたいと思います。その方が、皆さんもこれから「小さな拠点」づくりを実際にされる際、「そういえばあのとき、こんな言葉が出たな」、「そこからこんな連想が広がったな」という風に、お土産になるのではないかと思います。ぜひお持ち帰りいただければと思います。

今日は、先ほど素晴らしいご発表をいただいた3人のパネリストと藤井審議官という顔ぶれで行いますが、この三つの地域もそれぞれに異なります。「小さな拠点」に至る道は決して一本ではありません。例えば、竹葉さんの大宮地区は、「集落活動センター」という制度も生かしながら、いち早く「小さな拠点」を形にされたトップランナーです。池田さんのふれあい五箇の方は、これまた、一つの「小さな拠点」のつくり方のモデルを示されつつあると思うのですが、福祉という一つの分野を軸足としながらも、そこから、「断らない福祉」という感じで、どんどんやられると、自然と多機能な「小さな拠点」となりつつあると、こういう進行形を示していただいています。そして、平田さんの方は、実はもう10年越しですかね、この地域づくりの実組織を立ち上げて、コミュニティを徹底して、手間ひま掛けて練り上げている中から、逆に「小さな拠点」がないといけないという認識に至り、今まさにその一歩を踏み出されようとしています。このように色々な段階の色々な地域が、今「小さな拠点」づくりに向けて走りだしている。そういった中から、この「小さな拠点」の意味や、実際の手法、今後の未来・展望を、この70分間で話していきたいと思います。

土佐清水市の各町内60エリアに置かれた「区長場」



地区の防災も、観光も、お祭りもここで調整



【1】なぜ「小さな拠点」か？～「小さい」ことの可能性、今までの「大規模システム」の限界と補完

藤山 本日は討議の柱を3本立てましたが、一つ目の柱は、「なぜ、『小さな拠点』か？」です。

特に、「小さな」ということの意味について討議したいと思います。小田切先生も三段活用とおっしゃられましたが、「小さくては駄目だ」から、「小さくともできる」、そしてさらには、「小さいからこそ」できるものは何かということです。今までは、ひたすら大きいことを求めてきたようなところがあまりにも強かったように思います。この「小さいからこそ」できる、「小さい」ことの可能性を、それぞれの皆さんの実践や検討の取組の中でどのように考えていらっしゃるかというところから始めてみたいと思います。また国としても、「小さい」という言葉がつく委員会とか政策は、恐らく、私が知っている限り、初めてじゃないかと思いますが、国土政策局という国全体のデザインを考えるとこれを出されたきっかけなどについても、藤井審議官の方からお話いただこうと思います。

まずは、大宮地区の竹葉さん。今まで「小さな」ものは駄目だといわれていたのですが、逆に、大宮地区、あるいは竹葉さんとしては、「小さい」ことの価値・意義をどういうところに見いだしているか、どういう可能性を感じているか、ご披露いただけませんかでしょうか。

竹葉 ありきたりのことですが、「仲間づくり」という言葉で考えてみました。

「仲間づくり」、「仲間意識」が大宮産業をつくり上げた時に大きかったです。農協が引き上げるということに対し、高齢者から若者までが「仲間意識」を持って団結するという意識が働いたことで、株式会社大宮産業を立ち上げるのに大変楽をしました。まあ楽をしたと言っても、2年くらいは一応その仕組みをずっと考えたわけですが。「仲間意識」があるからこそ、今は小学校がなくなってもにぎわいづくりが簡単にできるのではないかと思います。高齢者の方には、年に6回は必ず大宮産業まで出てきていただくというのが、私たちの考え方です。

仲間づくり

藤山 「小さな拠点」は、やはり仲間が始めることができる、あるいは、そういった色々な人の声が届くといったあたりが非常に素晴らしいと思って聞いていました。では、ふれあい五箇の池田さん、「小さい」ことでいいことは何でしょう。

池田 自治体としては1町村に一つの社会福祉協議会しか持てないので、4町村が合併したとき、本当は隠岐の島町社会福祉協議会になるころでした。しかし私たちは、それまで培ってきて福祉のあり方とか、五箇村の人たちがたくさん働いておりましたので、雇用を安定させるという意味で、社会福祉法人として独立しました。組織が大きくならず、「小さい」ままでいたということです。平成16年に町村合併が行われましたので、10年たちますが、今となっては、とても正しい選択だったと実感しています。そしてそれがまた、先ほど報告させていただいたとおり、本当に、住民の皆さんの1本の電話にも応えていけるような「断らない福祉」、一人ひとりの声に応えていける福祉につながっていると思っています。

「法人独立」
断らない福祉

藤山 大きな団体の一部になるのではなく、あえてというか、頑張って、独立した法人を選んだからこそ、機動的に動ける。いちいち上にお伺いを立てなくてもいいということですね。だから、「断らない福祉」が今、実現しつつある。こういったところに、小さいことの価値を見いだしていらっしゃるということかと思います。では、川西の平田さんはどうでしょうか。

平田 先ほどもお話ししましたように、川西地区は五つの集落で自治連合

会をつくっております。「いつわの里」づくりと呼んで取り組んでいますが、これには五つの集落が仲良く過ごせる、そして、和をもって生活していく、さらにそういうことをすることによってひとつの“逸話”をつくっていくという思いが込められています。したがって、集落によって年齢構成なども違いますが、まずは5町の中で集約できる、みんなが賛成できることから少しずつやていましょうという形の中で始めたいと思っております。最初からあまり大きなことをドンとやるのではなく、みんなのコンセンサスが得られたものから徐々に実現していき、それができた段階で徐々に発展していきたいと思っております。

いつわの里
(輪・和・逸話)

藤山 ちょうど今、ソチオリンピックが終わろうとしています、川西地区もいわば、オリンピックのような“五つの輪”(=いつわ)でできているということです。しかも、小さな輪から徐々に、人々の間の和(五つの和=いつわ)を大切にしながら広げて、それが地域にずっと残るような物語、“逸話”(=いつわ)になっていく。こういうあたりを大切にして「小さな拠点」である郷の駅づくりに取り組んでいるということかと思えます。

仲間づくりによっても拠点はできるし、あえて独立して頑張ることもできる、また小さな輪から徐々に大きな輪へ積み上げていく、このようなお話が実践の場からあった訳ですが、では藤井審議官、こういった地域での「小さな拠点」づくりが始まっていますが、先ほど、冒頭申し上げたように、なかなか「小さな」ということは、今まで国の政策からは抜け落ちていたんですね。これを、わざわざ国土政策局で始められた背景なり思いというのは、どのあたりにあるのかということ、ぜひ、お聞かせいただきたいのですが。

藤井 キーワードとして、「捨てる→希望の砦」と書かせていただき

ました。人口減少という問題に対して、『人口が減少すると行政コストはどんどん増大してしまう。だから人口が少なくなってしまった集落はもう諦めて捨てて、もっと便利な所に移ってもらったらい』ということと言われる方がいます。これに対

捨てる→希望の砦
コンパクト・ネットワーク

して、先週ですが、国会で国土のあり方について議論があった中で、太田国土交通大臣は、「数が少なくなっても、集落に住み続ける人を大事にしなくては、国は成り立たない」と答弁しています。要するに、住み慣れた地域にずっと住み続けたいという思いは国民の共有の気持ちであり、その気持ちが、多様な地域を作り、日本を支えているのだから、そういう地域を切り捨ててしまったら、国は成り立たないということです。じゃあ、どうするか、というときに、「砦」が必要なんですね。これは、「お城」では駄目なんです。巨大なお城を造る余裕はないし、それではうまくいかない。「小さな砦」(=「小さな拠点」)が必要です。

それからもう一つ。これからは、高齢化が大変進みます。今、日本全体の高齢化率は20%ですが、2050年になると40%になります。ここにお集まりの多くの方は過疎地域に住んでおられますが、その状況に日本全体が追いついてしまいます。お年寄りがそれだけ多くなりますから、機能を集めたときに、1ヶ所で用事が済むような「コンパクトさ」がなければいけない。その「コンパクトさ」は同時に子育てにも役に立つ。そうすると、コンパクトなところに集めますから、住んでいる周辺部との交通ネットワークが大事ということになります。

キーワードに「コンパクト・ネットワーク」ということも書きましたが、いずれにしても、そういうもの（＝「小さな拠点」）でないとこの国を支えられないのではないか。これは国家的な課題だから国としてこの問題に取り組もうということで、3～4年前くらいから、小田切先生や藤山先生などにもご参加いただきながら、国土審議会ベースで議論をしてきたという経緯です。



藤山 ありがとうございます。次々と地域を捨てていくのではなく、そこに希望を見出していく、そのためには、コンパクトな中に色々な機能を詰め込んで、しかも、その拠点だけ栄えればいいのではなく、そこから各集落へのつながりをつくっていく。「ネットワーク」というのは、交通であり、色々な（活動の）マネジメントをイメージすればいいですね。

■小さく始めたから良かったこと

藤山 まず、1周目が終わりましたが、言い残したことがあれば。あるいは、お互い同士で聞いてみたいことなどがあれば。

平田 こちらの2ヶ所では実際に「小さな拠点」があって活動をやられているわけですが、小さかったから良かったということがもしあれば教えていただきたいと思います。

藤山 小さく始めたから良かったとか、小さくまとめているから良いということがあれば、ということですね。先ほどとも関連すると思いますが、いかがでしょうか。

竹葉 小さいから良いとか悪いとかはよく分かりませんが、大宮地区では、とにかく大宮産業を立ち上げるまで、ワークショップのようなことを何回もやってきました。その中で、農協が赤字だからやめるという事態に反発して、108人がずっと集まったということはあります。何かひとつきっかけがあればいいのではないかと考えています。なかなか、その後のきっかけづくりが難しいのですが。

藤山 なるほど。小さな地域だからまとまるのも速かったというか、うまくいったということかと思います。池田さんはいかがですか。

池田 大きくなった組織の下部組織といいますか、支所になってしまって、思ったことができないのではなく、小さいままだったからこそ、やりたいという“想い”のある方が中心になって、“志”を持って活動できていることがポイントではないかと思っています。

藤山 小さくても「自立性」を守る、固くいうと「自己決定権」を離さないということは非常に重要です。その自立性を手離してしまうと、今度は逆に動きづらくなるということが、実際、集落地域でも起きていると思います。小さくてもそこでちゃんと動いていけることの大切さについては、後半、様々な制度を考えるとところでもう一度論議できればと思います。

インディアンのことわざに、「たき火は小さな方がいい」というのがあります。人は、たき火をどんどん大きくしたがるのですが、大きくしたら熱いし近くに寄れないから、実はみんなどんどん離れていくんですね。そうすると、お互い同士も遠ざかってしまいます。やはり「大きなたき火」だけでなく「小さなたき火」をここかしこに起こすような考え方、小田切先生流に言えば「哲学」を、取り戻していかなければならないという気がしています。

【2】「小さな拠点」を具体的にどう作り、運営するか？ ～そして「次世代の定住」につなげるか？

藤山 それでは、2つめの柱に移っていききたいと思います。今度は、「小さいからこそできる」という哲学も踏まえて、具体的にどうやって「小さな拠点」をつくっていけばいいのか、という点です。また、「小さな拠点」の運営手法としては、今までのような大きくて専門的な施設や組織とは違ったやり方が求められるはずです。そのあたりを議論したいと思います。

<論点1>小さな拠点の作り方、運営手法の具体論 ～「合わせ技」など

藤山 まず、「小さな拠点」のつくり方や具体的な運営手法について、勘どころとか、検討の仕方、運営手法があればぜひご披露いただきたいと思います。竹葉さん、いかがでしょうか。

竹葉 私は「集落維持」と書きました。安心して暮らすためには、集落の維持をどうするか、住民力をどうやって引っ張り出すかが重要です。私どもの地域は、集落活動センターの取組の前に大宮産業の取組がありました。大宮産業では現在、給油所と商店・お米・肥料を行ってありますが、これは地域の方に利用していただいて維持できます。そこで集落活動センターでは、その維持というか、大宮地域のお金を外へ出さない方法を、今考えています。

集落維持
(仲良く)

どうやったらお金を地域外に出さないかについて、生活環境部会で検討する中で、平成26年から葬祭事業をやろうではないかということになり、2年間かけてその仕組みづくりをやってきました。今、葬祭屋に頼むと1件当たり100万～150万かかります。斎場に行っても、逆に葬祭業者が家に来てくれてもこれくらいかかります。でも、今、大宮地区は約300人・130戸ですが、10年後に200人・80戸になっても、葬祭業者はまけてくれません。それを何とかしようではないかということで、今仕組みづくりを考えています。自分たちで葬祭事業をやれば、大体60万前後でできます。大宮産業では今現在、祭壇を三つ預かっています。「葬祭事業をするなら譲る」といわれておりますので、それを集落活動センターの中の事業として、地域の皆さんでやったらどうかということを考えています。もちろんどこに葬儀を頼むかはそれぞれが選ぶことですので、大宮産業が選ばれるか、うまくいくかは分かりませんが、そうすることによって、大宮地区から外にお金を出さない方法を考えています。



もう一つは、給油所を何とかして維持しなければなりません。昭和40年代には、大宮地区には15戸の商店がありましたが、今、日用雑貨を売っているのは大宮産業だけです。あとは、タイヤ屋さん、自動車屋さん、酒屋さんが残っています。なぜ酒屋が残っているかというと、車に乗れなくても家にいても酒は飲めるからです。車で配達してもらっています。ただ、車に乗れないと大変です。大宮では最高齢で92歳の方が運転していますが、乗らざるを得ないのです。車がなかったら生活が止まります。高齢者率50%に近い大宮地区でもほとんどの家の方が軽トラに乗っていますが、この先、最初に倒れるのは自動車屋さんではないかと思っています。これは大宮地域の給油所の株主が守らなければならないかと思っています。だから、最初に言いましたように、仲良くやらなければいけないかと思っています。

藤山 ありがとうございます。「小さな拠点」は、集落地域の大きな安心と希望をつなぐものとして進めています。今後は都市にも必要だという議論も後段に出るかもしれませんが、当然ながら、集落の維持と「小さな拠点」づくりは表裏一体であるという点は非常に大切だと思っています。集落で実際にできているものをいかに生かすか。あるいは、葬祭なども非常に差し迫った問題ですが、そのように集落で必要とされていることにしっかり対応することで、色々な経済の循環も生まれます。ただ儲ければいいということではなくて、やはり、仲間としての支え合いがとても大切だということも、竹葉さんは常日頃からおっしゃっています。そういったものも含めた循環じゃないかと思います。

それでは、ふれあい五箇の池田さん、運営手法の具体論について、いかがでしょうか。

池田 はい。「職員・地域の皆さんの働き方や動き方の合わせ技」で

職員・地域の皆さんの
働き方や動き方の
合わせ技

す。先ほどの事例報告にもありましたけれども、「私は看護師だから、看護師業務だけやる」ということではなくて、送迎も、入浴対応も、食事対応も、昼からは陶芸班の担当職員としての力も発揮してもらいますし、4時過ぎからは学童保育の仕事もやってもらいます。ケアマネジャーさんにも、手芸班の担当もしてもらいます。パワーリハビリの担当の職員は、昼からはカラオケも担当しますし、利用者さんを送りながら、配食サービスもやってもらいます。何でもやらないといけない、それがふれあい五箇の職員です。

地域の皆さんの動き方も重要です。先ほど、配食サービスには民生委員さんにも手伝ってもらっていると言いましたが、配食サービスボランティアには15名近くの登録があり、それぞれが自分のできることをやってもらっています。それから、趣味活動の講師の方には週1回来ていただいていますけれども、これも、その動き方のひとつだと思っています。

それから、先日、全く違う地域の方が「ふれあい五箇で何かしたいからお手伝いできませんか？」とお電話くださいました。「ああ、それは嬉しい。何ができますか？」と聞くと、「お総菜を作れます」というので、「では、かっぽうクラブの講師さんをお願いします」というようなやり取りをしました。このように、本当に臨機応変に、「いつからお願いできますか？」というようなやり取りで巻き込んでいくことが「要」ではないかと思っています。

藤山 本当に素晴らしいと思いますが、逆に、職員さんから「ちょっと大変だ」といった声は上がってないでしょうか。

池田 私は、こういう一人何役の合わせ技がうちの職員には当たり前のことだと思ってきたので、職員に、お願いしますと言ったこともないし、地域の人たちに、お願いしますと言って回ったこともないです。うちの職員はみな、たぶん、「ふれあい五箇」というところはそういうところであり、これが、地域の皆さんや利用者さんの要求を実現していく上で最も良いやり方なのだと思っています。だから、大変だから辞めたいという職員は1人も居ません。離職率は本当に低いです。

藤山 本当に、皆さんぜひ、まずは行ってみななければいけませんね。

池田 ぜひ、隠岐へ。



藤山 でも、実際には、色々な資格の問題もあったり、色々なご苦勞もされていると思いますので、また後で、色々な制度の話のところでもう1回触れたいと思います。

さて、平田さんのところは、非常に粘り強いコミュニティの取組で、「小さな拠点」づくりの検討段階にあります。が、「小さな拠点」のつくり方、あるいは運営手法で、今、検討段階として見えてきていることはありますか。

平田 私は、「関わる」ということだと思います。地域住民ができるだけその施設に関わっていただくということが、うまく運営する基本ではないかと思っています。「小さな拠点」ですので、今後安定的に経営を継続していくということになると、できるだけ多くの人に利用していただかなければならないし、また、利用していただくような施設でないと、作る価値がないと思うんですね。ですから、どのように住民に関わっていただくかということだと思います。

(全員が)
関わる

今、山が大変荒れています。今朝も来るときに道をシカがたくさん走っていました。そこで先般のアンケートの中で、「山の木を提供していただけますか？」と聞いたら、5割の人が「提供します」とおっしゃいました。さらに「その山の木を切って、薪にしてくださいことができますか？」という、また同じように5割ぐらいの人が「木を切って薪にするボランティアをします」とおっしゃいました。また、それぞれの家に品物を届けたり農産物を集荷に伺う送迎のサービスをしていただけますか？という問いについては、3分の1ぐらいの人が「それをボランティアでやります」とおっしゃるわけです。



やはり、そういった住民の「小さな拠点」への愛着というものがないと絶対に成功しないし、将来につながらないと思います。そのためにはできるだけ多くの人に関わっていただくような仕組みづくりをしていかなければならないのではないかと思います。

藤山 ありがとうございます。山の木を提供する人、薪にする人、そして、運ぶ人という形で、多面的な関わりの場をつくろうとされている、その可能性が見えてきたということではないかと思います。

ここで、竹葉さんと池田さんにぜひおうかがいしたいのですが、実際に「小さな拠点」づくりを実践されている中で、このように一人でも多くの人に関わる、あるいは巻き込むような形で工夫されてきたことが、実はこういう点につながっている、というようなお話が、今までの取組の中で思い当たることがあったら、ぜひちょっとご披露いただきたいのですが。この「巻き込み方」というあたりが、「小さな拠点」の非常に大切なポイントではないかと思いますが、どうでしょう。

竹葉 私も、地域支援企画員の方に色々アドバイスをいただきながら、ワークショップをどういう風に開いたらよいかを沢山考えております。やはり世代で意識が違います。例えば、僕は70ですけども、60代の方は、まだ70代にはなっていないから、いつまでも元気だという意識です。僕は、いいや、そのうち元気じゃなくなるだろう、と言うのですが、60代の彼らは「いや、全然大丈夫」と言います。

ちょっと例を話させてもらいますと、環境部会で花を植えたらどうかという話になったんですよ。で、70 以上の方は賛成してくれるのですが、60 以下になると、「いや、広島県の世良へ行ったら岩桜がいっぱいあるけん、そこへ行ったらええ。わざわざ、俺たちがなぜ、種を蒔かないかんのか」と、そんな話になります。そこは何とかうまくやれないかなと思って、いつも考えています。これ以上は、次の論点で話そうかなと思っていたので。

藤山 分かりました。では池田さんはどうですか。やはり後を取っておかれますか？

池田 はい。後のテーマで。

＜論点 2＞次世代の定住を支える拠点としての取組・可能性

藤山 「小さな拠点」づくりでは、地域の危機感をちゃんと共有した上で、次世代の定住を実現していくための暮らしの条件も作っていかなければいけないと思います。先ほど、藤井審議官からも「砦」という話がありましたが、「小さな拠点」はそういった次世代の定住のための砦にもならないといけない。ということで、2 巡目は、「次世代の定住を支える拠点」として、こういう取組をしているとか、あるいは、こういう可能性があるのではないとか、あるいは、そのことを考えたら「小さな拠点」にこんな仕組みや機能が欲しいとか、そういうあたりをご披露いただけないかと思います。竹葉さん、温存されていた話をお願いしたいと思いますが。

竹葉 私は、「外の目線」と書きました。ちょうど 1 ヶ月前に、「鳥の目線」でものを考えると、足元まで見えない」と言われたのですが、確かにそうだなと思って、どういう方向でやれば集落活動センターがうまくいくかと考えております。例えば、地域おこし協力隊は、大阪などよそから来てくれています。その子たちは、僕らが見えてない目線から物事を見て、解決してくれることが多々あります。僕らには当たり前のことも、協力隊にとってはものすごく記憶に残るようで、「もったいない」、「惜しい」とよく言われます。また、県の地域支援企画員も、住んでいるのは 1 年くらいで、70 年間住んでいる僕らとは全然違う目線があります。東京から来たインターン生も、僕らが「何もない地域だ」と言うと、「いや、緑がいっぱいあるじゃないか。その緑を生かすことを考えたらどうか？」というようなアドバイスをしょっちゅうしてくれます。

外の目線

藤山 なるほど、そういった地域おこし協力隊や、地域支援企画員や、インターンの方も含めた『外の目』で暮らしの土俵を見だそうとされているということじゃないかと思います。池田さんの方はどうですか。

池田 キーワードが図になっていますが。私はもともと入所施設に居ましたが、入所施設は入所者の人と職員との 1 対 1 で全てが解決する世界です。一方、「ふれあい五箇」は在宅福祉の施設ですので、デイサービスや、ヘルパーが家に行く、家からふれあい五箇に来てもらう、という様々な形を取ります。ですから、利用者さん一人ひとりにとっては、周りに家族もいれば職員もいる、地域も、子どもたちもいるということで、たくさんの人と関わりあえる中に利用者さんがいるという点がポイントではないかと思っています。だから、



藤井審議官が「住み慣れた地域で当たり前に暮らす」ということを言われましたが、こういう関わりがないと住み慣れた地域で暮らすことができない、逆に言えば、これだけの関わり合いが持てれば、何とか地域だけで住み続けることができるのではないかということが、次世代の定住を支える拠点としてのひとつの考え方です。

藤山 この図をみると、利用者である「人」を取り巻く三角形ができていますね。普通、施設だとどうしても人と職員だけの一方向のやり取りになりますが、ふれあい五箇では、家族も地域や子どもたちも取り巻く中に利用者の方がしっかり位置づけられているという仕組みになっているということがポイントです。皆さんも思ったかもしれませんが、私は実際に（ふれあい五箇に）行っても、また先ほどの発表を見ても、ここで老後を過ごしたいなと思います。もっと言ってしまうと、生まれて、老いて、死んでいくんだったら、こういうところがいいなと思いますが、今、その秘密が分かったような気がします。単に、職員さんにお世話になるとか、何かやってもらうという関係ではなくて、地域の人にも家族にも包まれた中で暮らしているということが本当にすごいことだと思います。そういったことが、やはり次世代の定住にもつながりつつあるんじゃないかと思います。ちょっとお聞きしたいんですが、若い職員さんも定住して頑張っていらっしゃるんですが、実際に若い職員さんは、どんな気持ちでやってらっしゃるんですかね、地元に住んで。

池田 隠岐高校か、隠岐水産高校を卒業すれば、たいがい本土の介護福祉士の養成専門学校に2～3年行きますが、やっぱり帰ってくるんですよね。隠岐で暮らしたい、隠岐に帰って仕事を見つけようとされて、本土から帰ってくるということが起きています。これは男性も、女性もです。ですが、やっぱり、人材不足は否めません。

藤山 島根県でも、隠岐の方が山の方よりも最初に定住が増えているんですね。だから私は、「山は島に学べ」と言っていますけれども。平田さんの方はどうですか。次世代の定住に向けて、こういうことをやってみたいということがあれば。

平田 私は「ごもくずし」だと思うんです。先ほど竹葉さんもおっしゃったように、やはり昔からずっと住んでいる者ばかりで色々と考えても、なかなか新しいことは難しいし、先ほど小田切先生もおっしゃったように、イノベーションとか継続につなげるのは非常に難しいと思うんです。ですから、年代的にも10代、20代から100歳まで全ての人が関わり、また、外国から来られた方も関わり、またIターンやUターンの方々も関わるというように、多様な人たちが関わっていくことが、今後の地域づくりについて欠かせないと思います。我々ではやはり地域の資源はなかなか発見できません。ですが、都市に住む人から見れば、全てが「宝」だと思います。その「宝」を発見する人がいて、地域住民がそれを形にしていく。地域住民は作るのは得意ですから。さらに、都市から来られた方が、それを販売する方法についていろいろとアドバイスを。または、その広報活動については、やはり若い方々が主体を担って、ホームページだとかFacebookだとかを使って、

住民主体
(ごもくずし)



いろいろと地域の良さを発信し、都市住民の方がそれを見て、ぜひ住んでみたいなといわれるようなところをしたい。そういった場所をつくっていくのは、もともとの住民だけではできないと思うんですね。やはりグローバルな中で考えていかなければいけないことではないかと思っています。

藤山 「ごもくずし」のどの辺が一番重要になってくるんですかね。

平田 よくいわれるように、「ばかもの、外もの、若者」ですね、それだと思いますけどね。

藤山 なるほど、それがちりばめられてると。

平田 そうです。それと、年齢構成についても、若い人からお年寄りまで。

藤山 なるほど。いろんな“具”がちゃんと混ざっていると。

平田 そうですね。また、体の悪い人から、健常者から、いろんな人が関わっていくことだと思います。

藤山 なるほど。それでは、藤井審議官。今のようにこの三つの地域だけでも、色々な「小さな拠点」のこれからの勘どころなり運営手法が示されました。実は、「小さな」ということを初めて出したという点も新しいことですが、今回の「小さな拠点」の進め方が非常にユニークなのはそれだけではありません。国の今までのやり方は、決まったモデルを示して、「みんなその山へ登りなさい」という感じだったと思いますが、今回は12のモニター地域で取り組むという、あまり例のない“リーグ戦”をやられていますよね。しかも、地域の実情が違うので、「小さな拠点」づくりのやり方はそれぞれ非常に異なります。こういった、同時多発的なプログラムでやられていること自体、私は非常に目新しいというか、斬新だと思っているのですが、この「小さな拠点」という政策を全国に広めていくやり方について狙っているところなどがありましたら、ご紹介いただきたいと思います。

藤井 「課題は一つ、処方箋は複数」と書いたのですが、国土政策では、地域おこしや地域づくりということは今までもずっと色々やってきたと思いますが、国全体のデザインの中で、「小さな拠点」づくりをやろうとなったのはこの数年の話であり、どうやってつくっ

課題は一つ
処方箋は複数

たらいいのかはそれぞれの地域の問題ですから、はっきり言って、国が上から目線で分かるはずがないんですね。地域の皆さんにとっても、どうやっていったらいいのは、まだはっきりとした処方箋がないと思います。課題自体はひとつ、人口減少しても住み続けられる地域づくりという共通の課題ですが、それを実現する処方箋は地域によって様々だということです。だから、国が一方向的にやっても仕方ないし、国から指定してやるようなものでもない。とにかく、まずは一度、色々な処方箋を全部出し合って、解決の方向を見つけるというやり方しかないのではないかということで、こういうモニター調査という形をとったということです。

それから、さきほどの議論のところで、「希望の砦」というキーワードを出しましたが、今、次世代の定住の話がありましたので、少し補足させていただきます。

一番の心配は、とにかく、地域で住み続けられるようにしたらどうしたらいいかということであり、これは「守り」の砦であるわけですね。ですが、守りだけではその地域を支えることはできない。地域をどうやって元気にさせるか、元気を作っていくということも大事で

す。そのためには働く場が必要で、要するに外貨を稼がなければならないという問題があります。さきほど大宮産業のお話がありましたが、例えば、葬儀事業でも、お金が外に出ていくのではなくて、地域の中でできるだけ回していく、循環させることが重要だといえます。さらにその中で雇用を作っていくということが必要です。実はこれは藤山先生が試算されていますが、1,000人規模の集落でも、毎年2世帯ずつ新たに入り続けると、毎年入り続けるということですから大変ですが、2世帯ずつ入り続けることができれば、その1,000人規模の集落の小学校・中学校を維持することができる、廃校にしなくて済むということが、実際の地域のデータ分析で分かったのです。毎年毎年2世帯ですから大変ですが、全くできない地域ばかりではありません。やり方によってはできる地域もある。そうなっていけば、地域が消えていく、あるいは人口が半減するということばかりではなくて、小学校や中学校が維持できる。これは日本の社会にとっても非常に大事なことです。



そんなことが本当にできるか、ということですが、例えば、岡山県に新庄村という村があり、そこに道の駅があります。その道の駅でもうかれこれ10年ぐらい「ひめのもち」という餅を作っています。幹線道路の外れの道の駅なので車は普通停まっていらないのですが、その道の駅はちゃんと少しずつ雇用を増やしているんですね。なぜそんなことが可能なのか。その「ひめのもち」を一生懸命、天満屋や色々な百貨店などに売っています。すると買ってくれるんですね。「サトウの切り餅」みたいに全国マーケットで勝とうと思ったら無理ですが、やはり「おいしいものを食べたい」というニーズはあるんですね。だから、百貨店に売ると、あっという間に売れてしまう。こういう努力を十数年間積み重ねてきた結果、ずっと売り上げを伸ばしてきていて、雇用も少しずつですが増やすことができたということです。高齢化が進めば食べる量は減りますが、「少しでもおいしいものを食べたい」、「健康なものを食べたい」というニーズは高まっていきます。そういうニーズに対して、地域の“本物”が提供できれば十分勝負できる可能性はあるということだと思います。

ですから、「小さな拠点」を単なる「守りの砦」にするだけではなくて、少しでも新規の方が入ってくるような「希望の砦」にしていくことが、次世代の定住という点では重要ではないかと思っています。

藤山 ありがとうございます。実は、この高知県でも12月に研修会をりましたが、先ほどの人口予測プログラムはぜひ、皆さんのところでも確かめていただけたらと思います。1,000人当たりで大体平均して2世帯増えると、だいたいその地域の人口も、それから小中学校も守っていけるということが、実際にデータとしても出ております。

ちなみに、先ほど「ひめのもち」の例がありましたが、我々はやはり外から物を買って過ぎなんですね。食料とか燃料も含めて大体3分の2ぐらいを外から買っています。ですから、毎年1%ずつでもこれを取り返すと、500人で1世帯の定住は賄えるという試算もしています。

【3】「小さな拠点」を支える制度、行政のあり方と今後の展望

<論点1>従来の「規模の経済」&「縦割り」の弊害、今後の進化方向

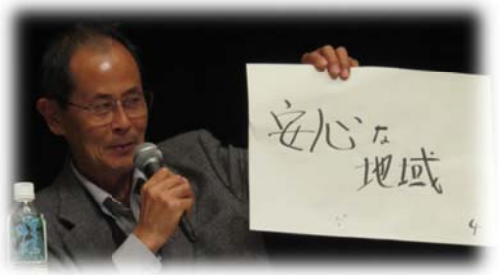
藤山 あっという間に時間が来て、最後の3番目の柱になりました。

モニター地域を中心に、「小さな拠点」づくりの歩みが今、始まろうとしています。そうした場合、どうしても今まではどちらかというと大きな拠点とか専門化した施設向けの政策がずっと続いてきましたから、やはりこのあたりを変えていかなければいけないということがあります。そこで、制度への注文とか、行政への注文をまずお聞きしたいと思います。いつものように竹葉さんからでいいですか。

竹葉 安心な地域をつくるためにはどうしたらいいか、ということです。

例えば、四万十市にもデマンドバスがありますが、大宮地区は旧役場から20キロ、現在の中村市の中心から50キロ程度の距離にありますので、このデマンドバスを利用するためには、まず1時間前に予約をし、30分間待って30分間乗車するということになります。また、運行ルートは行政区域の中でなければ駄目だという国の規制があるようで、実は大宮地区は愛媛県境まで2キロ程度と近く、愛媛県は送迎バスが県境まで来ていますが、時間帯がうまく合わないので、結局デマンドバスで20キロぐると遠回りしていかなければならないということです。こういうことを何とかしてもらえないかと思っていますし、ぜひこういう問題を解決する方法を習いたいと思っています。

現在応援していただいている県の地域支援企画員の皆さんに、色々な申請や規制について習いながらやっています。また、大宮産業（大宮集落活動センター）にはアドバイザー会議がありまして、アドバイザー会議で出てきたものはすぐに取組をするということができます。後で先生にもデマンドバスのことについて話をしてもらいたいなと思っています。



安心な地域

藤山 分かりました。行政制度では、やはり県境とか行政の境界とか、いろんな規制なんかも、地域支援企画員なども含めて、お手伝いする人が居ると乗り越えやすいということじゃないかと思っています。池田さんはどうでしょうか。

池田 まず、行政はあてにしていません。できるだけ、私たちがやりたいことを自由にやりたいので、行政は邪魔しないでください。隠岐の島町は4町村が合併していますので、行政の方は、『各地域に公平にサービスがなくてはいけない、「ふれあい五箇」だけ特段の補助金を出すこともできない』と言われます。「まあ、いいです」という感じです。

けれども、「ふれあい五箇」は在宅福祉を柱にやっておりますので、社会福祉、介護保険制度が駄目になってしまうと、一番基本のところが崩れてしまいますので、ここに厚生労働省の方はおられないとは思いますが、社会福祉の充実はずいぶん、お願いしたいと思っています。

行政はあてに
して
いません

社会福祉の充実

藤山 行政の人は、あてにされないで喜んではいけませんよね。「協働」の名の下に行政から仕事を押し付けられるという声も結構挙がっていますけれども、あてにされないということは、これは全員クビだということですからね。高知県の地域支援企画員のように、「自分たちに何ができるか」ということを考えなければいけないと思います。

では平田さん、どうでしょうか。

平田 すいません、私たちは力がないので、行政は大変あてにしています。よろしくお願いいたしますと思います。地域には金もありませんし、人も居ません、ただ、労働だけはたくさんあります。

やはり地域活性化は、市にとっても県にとって大切なことだと思います。それをつくっていくためには、やはり行政と我々住民が協働してやっていかなければいけないことだと私は思っています。

ただ、我々も行政に「おんぶに抱っこ」じゃいけないと思っていますので、我々のできることは可能な限りやります。けれども、どうしてもできないところ、例えば資金的な問題とか、立ち上がり当初の支援だとか、地域おこし協力隊だとか、そういう方々の力もお借りしたいということでございます。

今まで私もいろいろ経験しましたが、「造る」ということにあたっては、事業の中で非常に規制が強すぎる。「これはいけない」「こうでないといけない」ということが、多々あったと思います。今、池田さんがおっしゃったように、これからは住民主体の自由な取組への支援が必要ですし、やはり地域が本当に自主的に運営していくためには、新しいものを造っていくということへの行政の理解は欠かせないと私は思っております。

藤山 ありがとうございます。地域が変われば行政はどう変わるのか、というところが問われているように思います。



協働補完



＜論点2＞今後の抱負、展望 ～今から、それぞれの地域で踏み出す一歩とは？～

藤山 それでは、最後のまとめに入っていきたいと思います。

最後に、皆さんの今後の地域あるいは団体の抱負、ここを一步踏み出したいという抱負を、一人1分ぐらいになりますが、ご披露いただいた上で、藤井審議官の方から、今後の「小さな拠点」づくりの全国展開に向けた展望といったあたりをお聞きして、最後のまとめしたいと思います。それでは、竹葉さんから、今後の抱負を一言いただけませんか。

竹葉 なかなか抱負というのは難しいと思っておりますが、地域住民が全員で参加しやすい集落活動センターになればと思っております。各部会でそのための仕組みづくりを、毎週毎週、やっています。すごろくのように、横へ行ったり、右へ行ったり、左へ行ったり、あるいは1回休みということも多いですが、休むことによってルールづくりがうまくいくこともある。そうすることによって、全員が参加できれば、と期待を持っております。もう一つは、私も集落活動センターに至る前から、大宮産業の立ち上げに携わってもう10年近くなるので、私が言うことに対して何か弊害があったらいけないという心配もしております。もう少し、足元から見直そうと思っております。

藤山 ありがとうございます。では、池田さん、いかがでしょうか。

池田 ひとつと言われましたが、二つあります。ひとつは「資源を活かす」と書きましたが、住み慣れた地域でいつまでも暮らしていきたいという“志”を同じくする職員や地域の住民の皆さんと力を合わせてこれをやっていきたいということです。

もうひとつ、「小さな拠点」づくりは「福祉施設の使命」だと思っています。実は、東京で第1回検討会が9月に開催されたときに、小田切座長さんから「ふれあい五箇でやっていることは、全国の社会福祉法人でもやれますか？」と問われました。私はそのときに、「多分やろうと思えばやれるんじゃないですか」みたいな曖昧な答えをしたんですけど、今は「やらなくちゃいけない」と思っています。「福祉施設の使命」だと思っています。というのは、どの社会福祉法人も、その理念なり基本方針なりの冒頭に必ず「利用者本位の事業展開」と掲げていて、最後の方には「地域に根差した施設づくり」とか「地域の中で生き生きと活動する」というようなことを必ず謳っています。それを絵に描いた餅にするのではなくて、本当に実行していけば、この「小さな拠点」になってくる、必ずなるのではないかと、今、確信しています。高齢者が居るところには、必ずデイサービスや施設があります。日本中どこにでもあります。そこには何よりも、力を持った職員、マンパワーも必ずありますので、今私は、確信を持って、「どこでもできる」と言いたいと思います。

参加しやすい
活動センター



資源を活かす
福祉施設の使命



藤山 非常に力強い発言をありがとうございました。それでは平田さん、いかがでしょうか。

平田 「まず、一步を形に」ということでございます。我々は、これから拠点をつくっていかなくてはなりませんので、まず絵に描いたビジョンを形にしていきたいということです。川西地区は人口が3分の1に減りました。小学校も37名ということで複式学級になっています。この小学校を守るということではなくて、元の小学校に回復したい、できれば中学校をもう一度取り戻したい、という気持ちでやっております。

そしてまた「魅力づくり」ですが、現在、UターンやIターンで人口は増えてはきていますが、都会の人たちに「ぜひあそこに住みたい」と思ってもらえるような場所になるように、魅力あるまちづくりを今後進めていきたいと思っております。

藤山 ありがとうございました。全国初の「郷の駅」が形になることを祈っております。

非常に多彩な議論が展開されてきましたが、今後、こういった「小さな拠点」を全国展開するにあたっての展望について、藤井審議官のほうからおまとめいただければと思います。

藤井 「国土の細胞」と書きました。冒頭のご挨拶でも申し上げましたが、

「小さな拠点」は、最終的には国のデザインの中で、日本という国をつくっていく上での地域を支えるひとつの細胞になっているという形にしていかなければいけないと思っています。ただ、どういう風にしていったらいいかというところは、まだ明確な答えはありません。例えば、先ほどデマンドバスの問題がありました。冒頭で「小さな拠点」のキーワードとして「コンパクトとネットワーク」と言いましたが、コンパクトに機能を集めれば、そこから配達をするとか、そこに人を輸送するとか、そういうことが非常に重要になってくるわけです。ただ、交通も、大都市と同じ形のものを集落地域に適用して成り立つはずがありません。したがって、そういうことも含めて「小さな拠点」のデザインを描けばいけませんし、新しい規制の仕組みが必要です。もっと言えば、色々な規制を緩和するだけでは駄目であり、色々な規制を乗り越えてやれるような人材をサポートしてあげる機能も非常に重要です。さらに言えば、例えば東京だったら、若い人は、大企業に就職したら経理だけというように大きな組織の一コマになってしまいますが、田舎の「小さな拠点」に就職したら全ての様々な知識が身に付く、キャリアパスになる、というような形まで作っていかないと、本当は駄目ではないかと思っています。そういったデザインを、これから国も一緒に描いていかなくてはいけないということです。一緒に描いていく作業を、今日この会場でやっているところだといえると思います。

なお、ひとつご報告させていただくと、今、国では、こういった人口減少問題や集落の問題について真面目に議論しようと

まず一步を形に 魅力づくり



国土の細胞



いう雰囲気、特に今年になってから急激にそういう議論になっています。年が明けてから経済財政諮問会議も動き出しました。国土政策についても、国土の新しいグランドデザインの骨格を3月までに1回まとめろという動きになっています。国会では、そのための集中審議までやるという議論まで出てきておりまして、急激に大きな議論になってきています。

それはなぜかという、オリンピックです。2020年にオリンピックが日本で開催されますが、オリンピックが終わってしまったら、その後景気も落ち込みます。このオリンピックを「東京オリンピック」にしたのでは駄目で、「日本オリンピック」にしなければいけない。オリンピックの効果を、時間的・空間的にどうやって広げるか、これが日本のラストチャンスなんですね。その後、日本は人口減少・超高齢化時代に入っていきます。そこを支えられるモデルをオリンピックのときにまで作って、そしてそこからスタートして実行できるようにしていかなければいけないということを、みんなが思い始めているのです。だから、地域の問題、国土の問題、全体の問題を、国も、地方も、住民もみんな、あるいは経済界も一緒になって考えなければいけないという方向になってきているということです。まさにこれからの協働作業です。最終的には、そういう「小さな拠点」が国土の細胞になって、そして、私たちは、いきいきとした国土でいきいきとした生き方ができるように、生命力のある日本をつくれるようにしていかななくてはいけないのではないかと考えております。

藤山 地域づくりオリンピックというか、そうしたものを取り戻していくような中で、地域、国土だけじゃなくて、人間の生き方、働き方というのも含め、今、つくり直しの時代が始まろうとしているという感じがしてまいりました。

【まとめ】

藤山 それでは、もう時間が来ていますが、私の方からごく簡単に、全体の取りまとめをさせていただきたいと思います。

改めて「小さな拠点」とは何なのか。一つの正解があるわけではありませんが、共通して出てきたことは、色々と結び付ける機能、結節機能、小田切先生は「ローカル・ハブ」という概念を紹介されましたが、そういう“結び付ける機能”が非常に重要ではないかと思います。

「小さな拠点」づくりのキーワードとしては色々出てきましたが、まずは「自治」です。手作りの拠点でないといけないということがまず言えると思います。自分たちでつくり直せるということが必要ではないか。

2番目のキーワードは「循環」です。この「循環」も、経済の循環もあれば、環境やエネルギーの循環もあると思います。「小さな拠点」がこういうものの“結び目”になっていかなければいけないということです。

3番目としては、「循環」も「自治」も、あるいは先ほどの人間の働き方も、「多角形」だということです。ここに本当はミソがある。「多角形」の拠点をつくっていかなければいけない。生態系もそうですが、独り勝ちは長続きしません。みんなでそこにに関わり、できるだけ



いろんな人を巻き込みながらやっていく。竹葉さんから「仲間づくり」という指摘がありましたが、「多角形」を取り戻していくのが「小さな拠点」ではないかと思います。

そして、その先に「定住」がある、ということではないかと思います。これも、人や自然、あるいは、伝統のつながりの中に「定住」してこそ、意味があるのではないか。要は、使い捨ての中の地域ではあり得ないということです。

そして、「共生」。今日は集落地域をテーマにやってきましたが、やはり、都市の団地とか、あるいは、マンションがあるような地域にもこういう拠点は必要だと思っています。そして集落地域と都市地域がパートナーエリアとして、色々なものが交流し、循環していく。こういったあたりに、国土全体にもつながっていく大きなチャンネルがあるのではないかと思います。

最後に、行政とか制度の話がありましたが、やはり基本は、「現場発」です。現場「着」ではありません。現場は縦割りではなく“丸ごと”です。やはり現場から学び、現場へお返しするのが、行政であり、制度でないといけません。例えば、この高知県では、それを地域支援企画員という形で率先して示されています。

全国の何万もの地域が、いい意味で競い合い、また今日のようにつながり合うことで、新しい地域の形、国の形、そして、人間が生きる形を取り戻していく。今日は、そういう姿に一歩でも近づく日になったのではないかと思います。

大変限られた時間の中で、素晴らしいご議論をご展開いただいた4人のパネリストの方に、皆さんのほうから拍手をいただきまして、パネルディスカッションを終わりとさせていただきます。どうもありがとうございました。



■フォーラム会場の様子■



▲会場入り口



▲会場受付



▲会場ロビー(集落活動センターの紹介ブース)



▲フォーラム会場の様子(知事発表)



▲フォーラム会場の様子(パネルディスカッション)



▲フォーラム会場(客席)の様子